

令和4年度 博物館機能強化推進事業

Innovate MUSEUM事業 事例集





Innovate MUSEUM事業 趣旨・目的



令和3年8月に文部科学大臣から文化審議会に対して「これからの時代にふさわしい博物館制度の在り方について」の諮問がなされました。同年12月には、文化審議会において「これからの博物館法制度の在り方について」の答申が取りまとめられ、これからの博物館に求められる役割や機能として、まちづくり・観光など社会的・地域的な課題に貢献していくことの必要性が指摘されたところです。

本事業は、これからの博物館に新たに求められる社会や地域における様々な課題に対応する取組や博物館の組織連携・ネットワークの形成を通じた課題解決への取組への支援を通じて、博物館の機能強化の推進を図ることを目的とします。

本書の目的

本事業における事例の横展開のために、補助事業者の活動報告をもとに事例集を作成しました。いくつかの補助事業者においては、目的や課題、取組内容、成果などを掲載しております。ぜひ、参考にいただき、多くの博物館の機能強化への足掛かりになれば幸いです。

contents

- 2… 地域課題対応支援事業カテゴリー分け
- 3… ネットワークの形成による広域等課題対応支援事業カテゴリー分け
- 4… 令和4年度採択事業一覧
- 14… Pick up
- 15… **01 山形アーカイブ実行委員会**
事業名:地域の記憶「共創」アーカイブ事業
- 17… **02 公益財団法人金沢芸術創造財団**
事業名:「lab.5 ROUTINE RECORDS」展
- 19… **03 M3プロジェクト実行委員会**
事業名:M3(Motto Minna no Museum)プロジェクト
- 21… **04 岡山県立美術館 学校と美術館の連携委員会**
事業名:学校と美術館の連携事業連携
- 23… **05 学校法人中村産業学園**
事業名:高齢者をつなぐ美術館と医療・福祉施設、行政機関、公民館、他の博物館との連携事業
- 25… **06 熊本市現代美術館**
事業名:アートで解決する交流拠点プロジェクト
- 27… **07 東北発 博物館・文化財等防災力向上プロジェクト実行委員会**
事業名:東北発 博物館・文化財等防災力向上プロジェクト
- 29… **08 メタバースミュージアム事業実行委員会**
事業名:メタバース美術館の構築事業



地域課題対応支援事業

採択数…43件

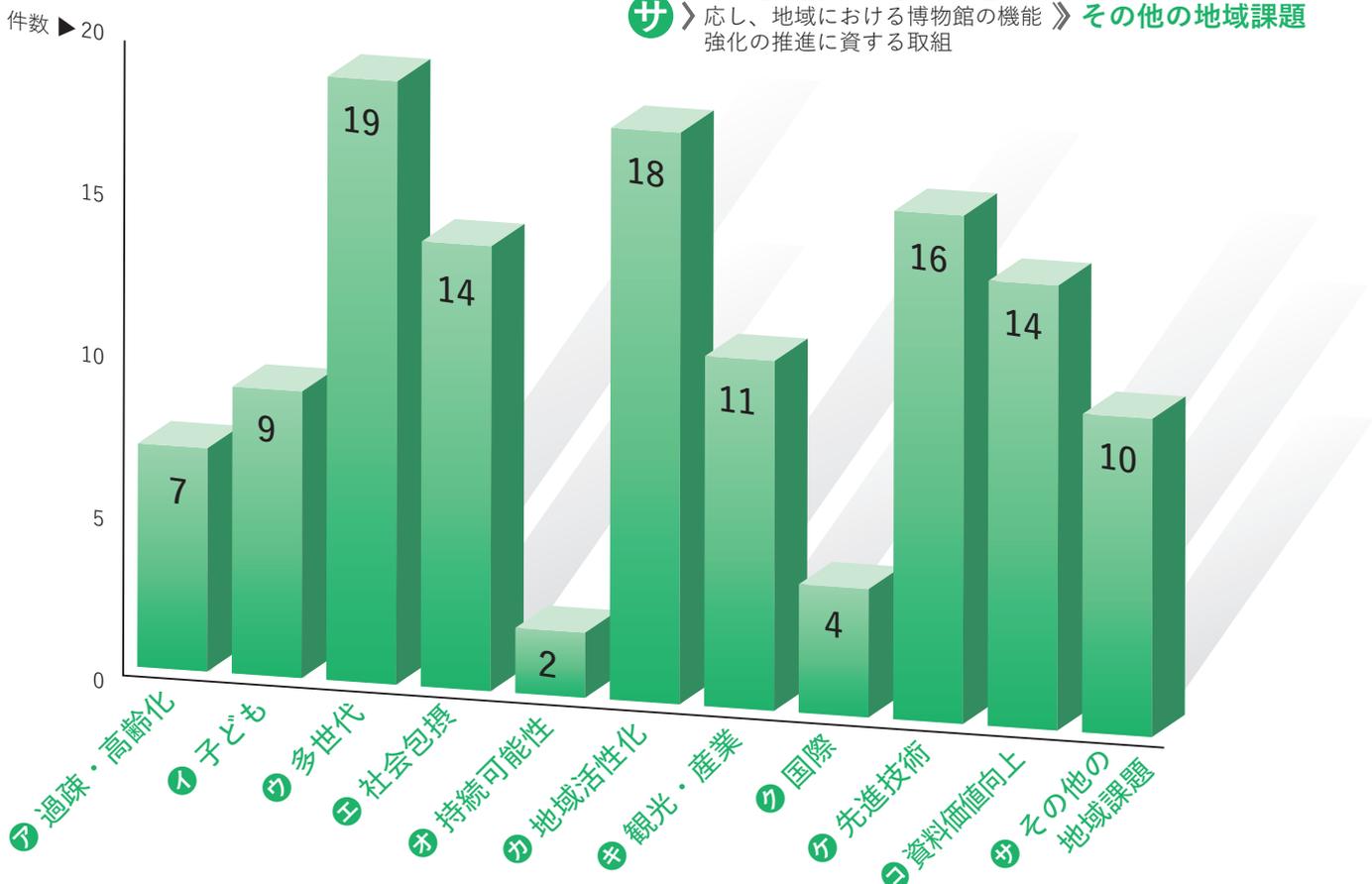


これからの博物館に新たに求められる社会や地域における様々な課題（地域のまちづくりや産業活性化、社会包摂、人口減少・過疎化・高齢化、地球温暖化やSDGsなど）に向き合い、解決に先進的に取り組むものであって、地域における博物館の機能強化の推進に資する取組。なお、実施にあたっては、まちづくりや福祉、教育、国際交流、観光、産業、環境などの関連団体、関係者とつながっていることを要件としました。

カテゴリー分け

- ア** 地域の人口減少・過疎化・高齢化に対応した取組 **過疎・高齢化**
- イ** 少子化・子育て支援に対応した取組や未来を担う人材育成にかかる取組 **子ども**
- ウ** 地域課題解決に向けた多世代の学びの創出にかかる取組 **多世代**
- エ** 社会包摂(孤立・孤独対策を含む。)や多文化共生を促進する取組 **社会包摂**
- オ** 持続可能な社会の実現（地球温暖化・地域の環境破壊等への対応を含む。）に向けた取組 **持続可能性**
- カ** 地域の文化財や文化・自然資源の保存・活用を通じたまちづくり・地域活性化の取組 **地域活性化**
- キ** 地域の文化・自然・産業資源を生かした観光振興・産業振興に資する取組 **観光・産業**
- ク** 国際交流・国際発信による地域活性化に資する取組 **国際**
- ケ** デジタル技術等の先進技術を用いた新たな鑑賞・体験・学習モデルの創造によるコミュニケーション活性化の取組 **先進技術**
- コ** 実物に触れる感動の醸成による地域資源・博物館資源の価値向上(地域ブランドの向上)と新たな知の共有にかかる取組 **資料価値向上**
- サ** その他の社会的・地域的課題に対応し、地域における博物館の機能強化の推進に資する取組 **その他の地域課題**

なお、事業実施は複数のカテゴリーにまたがって取り組まれている。



『 ネットワークの形成による広域等課題対応支援事業 』

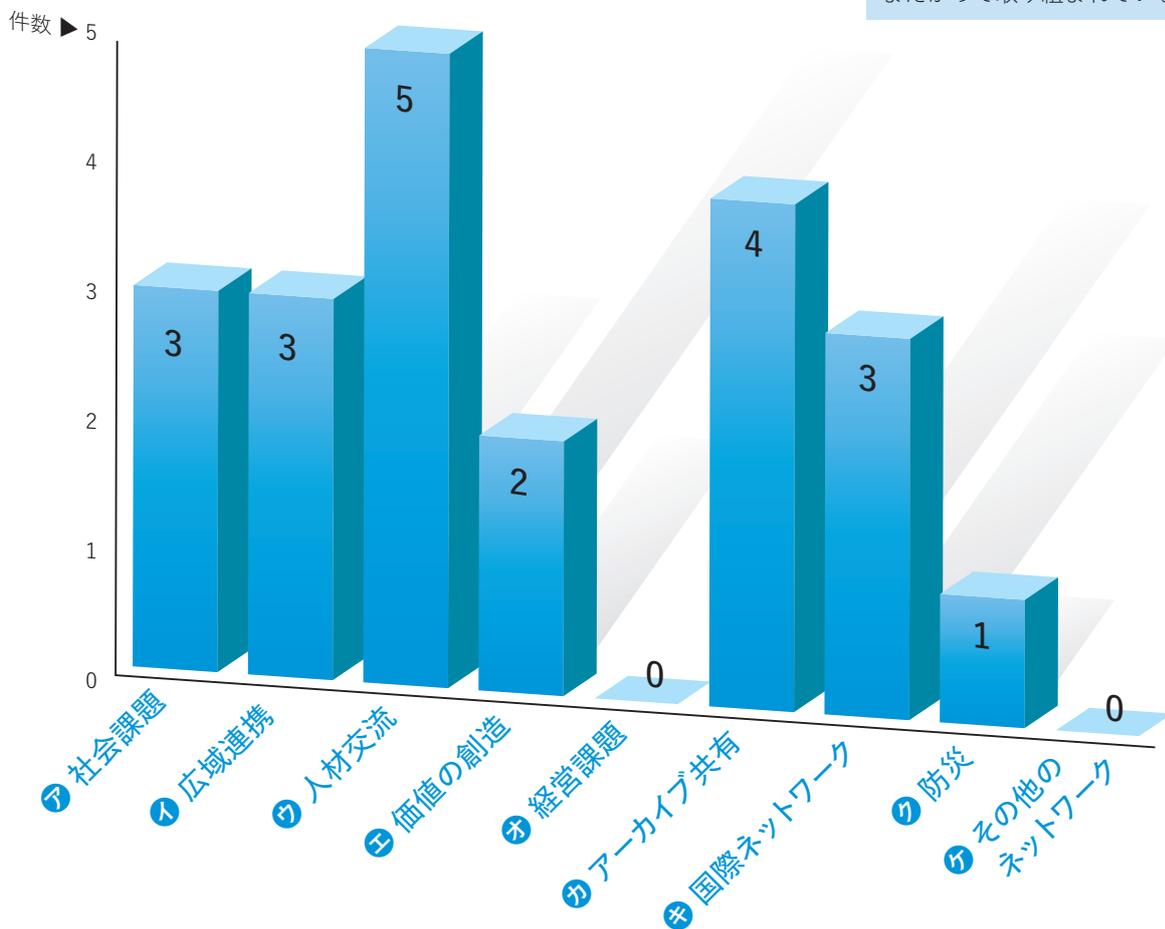
採択数…7件

博物館又は多様な機関等との組織連携・ネットワークの形成を通じた資源投入や人材確保、人材・ノウハウ・情報等の共有による課題解決に取り組むものであって、広域的又は多様な機関等との協働を通じた博物館の機能強化の推進に資する取組。なお、「ネットワークの形成による広域等課題対応支援事業」は、博物館単館では解決が難しい課題に向き合うために、自治体の枠を超えて複数の博物館やその他の団体が連携し、それぞれの組織がもつ人的・物的資源やノウハウを共有して取り組むものであり、中核館には、事業に参画する連携館への資源の共有を行い、連携館を牽引してともに課題解決にあたることを要件としました。

カテゴリー分け

- ア > 博物館資源の活用・応用による社会的・地域的課題への対応 >> **社会課題**
- イ > 単独の博物館(特に小規模館)では実現が困難な課題への対応 >> **広域連携**
- ウ > 人材交流や連携活動を通じた職員の資質向上や資料価値の磨き上げ >> **人材交流**
- エ > 博物館の社会的価値・便益や国際的価値の創造・向上 >> **価値の創造**
- オ > 経営課題への対応 >> **経営課題**
- カ > デジタルアーカイブやコンテンツ等の連携・共有による課題対応 >> **アーカイブ共有**
- キ > 国際的ネットワークの構築による課題対応 >> **国際ネットワーク**
- ク > 災害対応・防災等に当たって博物館資料を保全するための対応 >> **防災**
- ケ > その他の課題対応のためのネットワークの形成を通じた博物館の機能強化の推進に資する取組 >> **その他のネットワーク**

なお、事業実施は複数のカテゴリーにまたがって取り組まれている。





令和4年度 採択事業一覧

地域課題対応支援事業に 取り組んだ43事業を紹介

国際黒曜石会議開催に向けた 地域連携プロジェクト

01

地域活性化
観光・産業
国際

えんがるの宝を守り、未来に つなげるプロジェクト実行委員会

遠軽町埋蔵文化財センター

文化財による
観光・地域振
興のモデルづ
くりや国際黒
曜石会議を契
機とした地域
の国際化に向
けた受入体制
の整備、デジ
タル技術を駆
使した文化財



の認知度向上、学習スタイルの提供などの課題を解決するため、博物館活動の持続的な機能強化を目指した。

ミュージアムの資源を活用した独創的な地域 観光コンテンツの開発と普及

02

地域活性化
観光・産業
国際

仙台・宮城ミュージアム アライアンス

せんだいメディアテーク

学芸員、デザイナー、市民研究者などが参加する研究会を組織し、地域の自然、歴史、市民活動、ミュージアムなど文化資源の情報を、市民や利用者の視点から見て、効果的かつ魅力的に伝えることのできる観光ガイドについて検討し、多言語で制作した。内容は、地域で活動する芸術家や文化人など複数人がガイド役となって、各々の観光ルートを示すものとした。ガイドの制作にあたり、将来的な活用モデルとして、ミュージアムや文化財を紹介する試験的なツアープログラムを行ったほか、仙台市内中心部の商業施設でミュージアムの情報を集約した展示も行った。



四感でこけしを感じる学習環境構築に向けた こけし文化のデジタル化事業

03

観光・産業
先進技術
資料価値向上

蔵王町伝統産業会館 (みやぎ蔵王こけし館)

蔵王町伝統産業会館(みやぎ蔵王こけし館)

地域の遠刈田伝統こけし工人こけし組合と連携し、学芸員相当の専門家と共にこけしに関する文化、芸術、技術などを整理し、デジタルアーカイブ化する写真・動画のデジタル素材の収集を行った。また、大学ゼミの協力を得て、遠刈田伝統こけしとこけし館の展示に関する課題を洗い出し、それに基づいて収集したデジタル素材を活用し、新しい展示企画としてこけし紹介動画を制作した。同時に、遠刈田伝統こけしを紹介した冊子の制作を行い、来館者とのコミュニケーションを促進する環境を構築した。地元の小学校と協力し、次年度の学校教育カリキュラムを構築し、新しいこけし体験プログラムを造成した。



あきた鉱山系資料館ネットワーク構築事業

04

過疎・高齢化
地域活性化
先進技術

あきた鉱山系資料館ネットワーク 構築事業実行委員会

秋田大学大学院国際資源学研究所附属
鉱業博物館

資料館の関係者が一堂に集まり交流する場を作り、情報共有と意見交換をした。また、秋田大学鉱業博物館が、資源分野を学ぶ講座を提供し、各館で活動する職員・ボランティアの専門的知識の底上げを行い、デジタル技術を用いて各館が所蔵している貴重資料を記録し保存するとともに、標本の魅力を広く一般に伝えるために3D動画やAR技術を用いた展示を展開した。



地域の記憶「共創」アーカイブ事業

05

地域活性化
観光・産業
先進技術

山形アーカイブ実行委員会

山形大学附属博物館



大学の研究者、博物館学芸員、そして山形市民が協働して、山形市中心市街地の江戸時代から現代までの写真や人々の証言、博物館資料などを収集およびデジタル化し、山形のうつりかわりを Web 上で直感的に操作して閲覧することができる「山形アーカイブ」を構築した。また、デジタルアーカイブの意義はもちろんのこと、山形の歴史を物語る資料とは何かを山形市民に伝えるための普及イベント「ななはく!」を実施し、資料の収集と活用方法の普及に努めた。

2022「みる・よむ・体験する」
ねりまフォーラム事業

**「みる・よむ・体験する」
ねりまフォーラム実行委員会**

ちひろ美術館・東京

文化芸術体験へのアクセシビリティを高めるプログラムを実施した。子育て世代には、あかちゃんや子ども向けの鑑賞会を通じて美術館に来やすい環境を提供。外国語を母語とする家族も参加しやすいよう、子どものワークショップで通訳を準備、環境を整備した。大人向けの鑑賞会では、全盲の美術鑑賞者をナビゲーターに迎え、新しい美術鑑賞の体験を共有した。図書館と連携してブックリストを作成し、美術館の所蔵品カードを活用したワークショップを図書館や地域の施設で実施した。若者支援NPOとは子どものためのワークシートを作成した。先進事例や障害者をもつ当事者のヒヤリングを行い、今後の活動の学びを得た。



06
子ども
多世代
社会包摂

地域文化資源の活用に根ざした包摂的コミュニティ
形成のためのミュージアム機能強化モデル構築事業

**「都市のカルチュラル・ナラティブ」
プロジェクト実行委員会**

慶應義塾大学 アート・センター

異なる条件や価値観を持つ様々なコミュニティを共通の文化体験を通してゆるやかに接続し、包摂的な社会の創出に寄与する試みを実践した。また、様々な地域文化資源を可視化し、その活動や担い手、異なる世代をつなぐプログラムを実施した。異なる領域の文化資源を組み合わせたワークショップを通じて、参加者の交流や異なる価値観の受け入れを促進した。文化財との直接的な対話を通じて地域コミュニティの分断を縫い合わせ、多様な文化が共生する社会の実現に寄与するワークショップを開発・開催した。また、事業の円滑な運営とともに、プロジェクトの成果として共有するためのモデル開発を行った。



07
多世代
社会包摂
地域活性化

中国古代青銅器の3Dデジタルコンテンツを活用した新たな
鑑賞・教育モデルの構築およびその地域的波及に関する事業

泉屋博古館東京

泉屋博古館東京



展覧会で中国古代青銅器の実物展示とともに、3D スキャン撮影データを元にした動画およびホログラムを上映、中国古代青銅器の新たな鑑賞方法を提示した。なお、会期終了後には動画ならびに展示室 VR を WEB 公開した。港区内で中国古代青銅器を所蔵する根津美術館との連携により、松岡美術館も含めた3館での関連イベントやスタンプラリーを実施。また、東京学芸大学と連携した公開講座・ワークショップでは「金文」に着目し、金文の鑑賞入門講座と、金文を古印に铸造するワークショップを開催。他機関との連携を活かし、座学と体験も伴う新たな鑑賞プログラムを構築し、実施した。

08
地域活性化
先進技術
資料価値向上

「古代オリエント」で集まり、つながり、
広がる!ミュージアムプロジェクト

**古代オリエントをたのしむ
実行委員会**

公益財団法人 古代オリエント博物館

古代オリエントの文化を通してあらゆる人々（年齢・性別・関心・身体的個人差など）が集まり、新たに人のつながりができ、さらに広がって、新しい多角的な学びの場や交流の場が築かれることを目指した。その目的のために、ハンズオン教材の作成、視覚・聴覚障害者向けサービス、多言語化などの対応、豊島区内のミュージアムとしての役割の強化、AR・VR を用いた展示解説システムなど新しい鑑賞システムの構築という大きな3つの活動を行った。



09
地域活性化
先進技術
資料価値向上

よこはま縁むすび講中

**よこはま縁むすび講中
実行委員会**

横浜市歴史博物館

地域文化圏醸成事業では、横浜北部4区（旧港北区：港北区・緑区・青葉区・都筑区）をひとつの大きな地域文化圏として認識できるような情報の集約と発信を行った。また、市民が地域を知って、より身近に感じられるような集客型または公開型の地域文化普及啓発事業を実施した。



10
多世代
地域活性化
その他の地域課題

守れ!文化財~モノとヒトに光を灯す~

**「守れ!文化財~モノとヒトに光を
灯す~」事業実行委員会**

新潟県立歴史博物館



京都府立聾学校にて、生徒とともに資料を活用したワークショップを行った。そのなかで資料の取り扱いを学び小さな展示（模型）を作ることで資料に対する理解を深めた。また上越市立歴史博物館と連携しながら身体障害者補助犬に関するワークショップ等を実施し、「障害」に関する理解を促した。さらに盲聾教育や義肢装具に関する資料目録を整備、これらの資料群について一般の理解を深めるべく資料集を刊行した。

11
多世代
社会包摂
資料価値向上

砺波の民具AR・ネットワーク活用事業

砺波の民具AR・ネットワーク活用委員会

砺波市立砺波郷土資料館

12
地域活性化
先進技術
資料価値向上

砺波の民具や昔の暮らしへの関心を高める事業の展開やARの画像・動画・アニメーションの機能を生かした展示、広報方法の構築を行った。また、連携各館、関係団体の特徴や機能、強みを生かした多様な事業展開、連携体制の構築を行った。その他にもAR等を使った展示とともに、「実物に触れる」「試す」「感動」をキーワードにした体験活動の展開や、砺波の民具や地域文化への理解を促すためのボランティアグループの育成と研修会などを行った。



「lab.5 ROUTINE RECORDS」展

公益財団法人金沢芸術創造財団

金沢21世紀美術館

13
社会包摂
先進技術
その他の地域課題



photo: Akifumi Nakagawa

「彼らの日常を音楽へ」というメッセージを掲げ、知的に障害のある人が習慣的に繰り返す日常の行動から生まれる音や言葉を音楽として届ける展示を実施した。全国5箇所に住む小学生から成人まで13名の知的に障害のある人から聴取した16種類のルーティン音の展示、聴取風景の上映、ルーティン音を組み合わせる自由作曲できるDJブース、ルーティン音から生まれた楽曲の視聴ブースという4つの要素により、鑑賞者が音を介して知的に障害のある人の存在を認知、理解できる構成となっていた。また、調査研究として関連プログラムの実施と、アクセシビリティの向上、展示体験の評価を行った。

金沢大学近代化遺産振興事業

金沢大学資料館

金沢大学資料館

14
地域活性化
観光・産業
資料価値向上



近代化遺産に関する事前アンケートを実施し、金沢市内における近代化遺産の認知度に関する調査を行った。その結果を踏まえ、近代化遺産の活用・継承のためシンポジウムを開催し、近代遺跡の保存・活用を推進する日本考古学協会会長、移設された近代化遺産の管理・展示分野の専門家、金沢市の近代文化遺産に精通する研究者等が研究発表を行い、その後、連携館の関係者も参加した討論会を開催した。また、シンポジウム終了後には、ライトアップした近代化遺産建築物を鑑賞するキャンパス・ツアーも開催した。本シンポジウムに関する配付資料、マップ、英語対訳付き研究報告書を作成した。

安曇野市の歴史文化遺産の再発見事業

安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

安曇野市豊科郷土博物館

15
社会包摂
地域活性化
その他の地域課題

中核館や安曇野市教育委員会の職員、地元有識者等の共同執筆により、三郷地域の歴史文化遺産を紹介する一般向けの冊子を刊行し、地元の小中学校にも配布し、授業等で活用された。刊行した冊子の内容はWEBサイト上に公開し、市域内外に地域の歴史と魅力を発信した。また、地元中学校の生徒と一緒に調査活動を実施し、調査成果をもとに、三郷公民館及び社会福祉協議会三郷支所等と協働して、地域住民を対象とした講座を実施した。また、令和元年度から刊行した『明科の宝』、『穂高の宝』、『豊科の宝』を活用した講座を行った。



安曇野市ミュージアム活性化事業

安曇野市ミュージアム活性化事業実行委員会

安曇野市豊科近代美術館

16
多世代
先進技術
資料価値向上



複数館の職員がギャラリートークを行い、相互に他館を紹介した。美術館・博物館の資料を学校に持ち込み、1日解説を行うことで職員同士が作品鑑賞のスキルを学ぶ機会を提供した。本物の作品や現役アーティストによるパフォーマンスで生の芸術に触れる機会を作り、学芸員の研修会では、彫刻クリーニング専門家から実技をまじえたレクチャーを受け、すぐ実践可能な修復・保存の専門知識を深める機会となった。オンラインギャラリートークなどでオンラインコンテンツを充実させることに努めた。相互に聴講することの少ない学芸員等による美術講座を市内施設で行い、オンラインで同時配信した。博物館経営を学ぶ学生を対象に各館を巡るプログラムを組み、館所蔵の資料を大学に貸し出して大学内で調査・展示を行った。

野尻湖周辺を活性化させる博物館活動事業

野尻湖周辺活性化事業実行委員会

野尻湖ナウマンゾウ博物館

17
社会包摂
観光・産業
国際



ユニバーサルミュージアム整備事業では、外国人やハンディキャップのある方が学び、楽しんでもらえるような博物館のあり方をワークショップを通じて探り、「展示ボード」の設置でより利用しやすい博物館に整備した。サテライトミュージアム整備事業では、店舗や宿泊施設の方に、3Dプリンターで製作したナウマンゾウの模型に着色をして展示してもらい、野尻湖をアピールする活性化のツールとして使ってもらった。3D画像入り収蔵資料データベース整備・活用事業では、写真撮影データをもとに3D画像を作成してホームページに公開した。さらにその画像で中学2年生を対象に授業をおこない、本物の化石に触れなくても、画像を見ながら細部の観察や計測ができることなどを学習してもらい、3D画像の活用方法を開発した。

飛騨みやがわ考古民俗館保存活用事業

石棒クラブ

飛騨みやがわ考古民俗館



石棒クラブで撮影してきた飛騨みやがわ考古民俗館の収蔵資料である石棒の写真を飛騨市オープンデータサイト・文化庁の文化遺産オンラインに登録した。また、博物館資料である石棒と実物展示である茅葺き民家について学ぶ講座を実施し、展示パネルをARで作成し、データによる展示を実現した。

18

過疎・高齢化
多世代
先進技術

地域との協働による未指定等文化財の調査
および保存環境の構築事業

三島地域資料調査会

三島市郷土資料館



地域全体で地域資料の保存・継承を担う意識を醸成するための周知活動や、調査・保存・活用の担い手（ボランティア）を確保・養成するための講座を開催した。また、学校・民間に所在する地域資料の調査・リスト化を進め、日常的契機による散逸・消滅を防ぐとともに、災害時の備えを構築した。

19

子ども
多世代
その他の地域課題

美術館のアクセシビリティ向上推進事業

美術館のアクセシビリティ向上 推進事業実行委員会

三重県立美術館

事業目的を達成するため、本事業では先進事例等の調査により、さまざまな職種のスタッフがアクセシビリティへの理解を深め、組織全体で事業の持続可能性を高める人材育成を行った。また、これまでの事業で実施が一度限りとなっていたプログラムの企画運営や教材開発の改良・継続を試み、報告書の作成により、活動の普及に努めた。



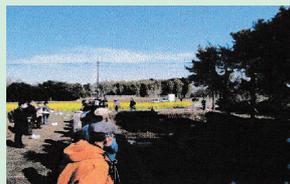
20

子ども
多世代
社会包摂

斎宮を核とした平安文化活用発信事業

斎宮活性化実行委員会

斎宮歴史博物館



斎宮跡の価値の根源といえる、50年以上に及ぶ発掘調査成果を紹介する公開講座・発掘成果報告会を、博物館と地域の人材が協働で開催し、高度な情報を共有・発信することで、斎宮跡を核としたまちづくりの人材育成や、交流人口の拡大に努めた。講座はオンライン配信もあわせて行い、より広範な層の参加を得るとともに、これからの博物館の情報発信を試行できた。さらに、大都市圏（千葉県市川市）・歴史的文化への関心が高い地域（島根県）・地元三重県の文化施設や高等教育機関と連携して開催することで、それぞれが持つノウハウを共有し、他機関との連携・協力関係の構築を進めることで、今後の博物館活動に役立てられる資産となった。

21

地域活性化
観光・産業
資料価値向上

ケアしあうミュージアム

ケアしあうミュージアム事業 実行委員会

ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

「NPO 法人しが盲ろう者友の会」と共働した美術作品鑑賞の実践および成果展示を行った。併せて、在日ブラジル人学校「サンタナ学園」に通う子どもたちとのアートワークショップや中核館近隣地域における地蔵盆のインタビューとブックレット作成を進めた。これらの成果を広めるフォーラムを開催し、記録映像をWEB公開した。



22

過疎・高齢化
多世代
社会包摂

文化資源の新たな魅力発信による文化観光
拠点の形成Innovate MUSEUM事業

京都府立丹後郷土資料館

京都府立丹後郷土資料館

文化財を活用した新たな魅力を発信するために、丹後地域の郷土料理「丹後ばらずし」の体系やこれまでの継承の取組を調査し報告会を実施。その魅力と継承の方向性について参加者とともに意見交換を行った。また、天橋立等 e-Bike 周遊モニターツアーや熱気球による空からの天橋立・国分寺跡景観俯瞰体験、文化財を活用した文化芸術イベント等を実施して、地域の文化資源の魅力発信と文化観光の振興に努めた。



23

観光・産業

ABCモデルによる新たな美術鑑賞
プログラム創造推進事業

新たな美術鑑賞プログラム 創造推進事業実行委員会

京都国立近代美術館



作家や専門家 (Artist)、視覚障害者 (Blind)、美術館学芸員 (Curator) の三者協働による「ABCモデル」を構築するため、三者が連携したワークショップや鑑賞プログラムを実施した。また、所蔵作品の魅力をひもとく「ツールボックス」やさわって楽しむ鑑賞ツールの制作に向け、検討会議、サンプル制作、当事者による検証を行った。さらに「さわる図」の活用促進を目指し視覚障害者を対象とした鑑賞ワークショップを実施した。また、全国の美術館関係者と共に「さわる図」や「視覚だけに依らない鑑賞」の実践事例を共有し、議論するフォーラム（研究会）を実施した。

24

社会包摂
持続可能性
資料価値向上

次世代と地域文化をつなぐミュージアム
プロジェクト Ver.2

KYOTO地域文化をつなぐ ミュージアムプロジェクト実行委員会

京都府立京都学・歴史館

ふるさとの魅力再発見プロジェクトとして地域の小学生約30名を対象として、学芸員サポートのもと、須田区の湯舟坂2号墳や周辺の遺跡等を巡るツアーを実施した。また、これまでの取組が網羅された、次世代にもわかりやすいデザインの Web コンテンツを実装。取組の普及につなげた。加えて、今年度の取組紹介に加え、「次世代と地域文化をつなぐミュージアムの役割や課題」について有識者や参加者と一緒を考え、つなプロ理念や成果等の発信を行うシンポジウムを開催した。全プロジェクトの効果についてアンケート結果の分析等を踏まえ、次年度以降の取組に活かす。



25

過疎・高齢化
子ども
地域活性化

博物館を核としたパブリック空間活用
イノベーションプログラム

京都歴史文化施設クラスター 実行委員会

京都府京都文化博物館

みち資源活用事業とみちづかい可視化事業を実施した。前者はみちの資源として、みちそのもの、建物、景観をとりあげ、みちが憩いの場や芸術鑑賞、文化活動、社会関係構築の場となることを実証的に示した。後者の事業では、博物館資料を活用して、近世～近代のみちづかいの多様さを「カオス」と捉え発信し、現代に活かせるアイデアを多数示した。



26

地域活性化
観光・産業
その他の地域課題

誰もが楽しめる鑑賞の授業をつくる
(多様な見え方・感じ方)

文化財に親しむ授業実行委員会

京都国立博物館



「誰もが楽しめる鑑賞の授業の実践」では、京都市立の小中学校（育成学級、色弱の児童・生徒を含む）への訪問授業と、教員が実施する授業への複製貸出を主たる事業とした。「事例調査・手引きの作成」では、先進的な事例を行う博物館に調査に赴き、訪問授業やその他の博物館教育プログラムに活かすことのできる情報を収集した。これらをもとに、「誰もが楽しめる鑑賞の授業をつくるための手引き」を作成した。

27

多世代
社会包摂
先進技術

近代京都—日本画の制作・鑑賞・流通をめぐる
ネットワークの再構築

泉屋博古館

泉屋博古館



有機的関係の再構築と活性化を目指した。制作の根源となった写生帳のアーカイブ化・発信、日本画の商品化・流通を担い画家を支えた扇老舗での扇子文化紹介、寺院での襖絵鑑賞体験などを、イベント、周遊マップ、SNSなどで発信し、京都の文化理解の深化、新たな観光スタイルの提示を行った。

28

地域活性化
観光・産業
先進技術

M3 (Motto Minna no Museum) プロジェクト

M3プロジェクト実行委員会

大阪市立自然史博物館



視覚障がいの方々に博物館を楽しんでもらうプログラムを試行実施し、評価した。また、平常の常設展示などへの受け入れ改善として、点字・墨字冊子等の支援資料や触察案内図を設置した。また、職員向けに適切な対応を促す研修、発達障がいのある利用者のためのプログラム作成・試行と利用促進のための講演会、ソーシャルストーリーガイド作成実習を実施した。博物館の取り組みを多くの方に広く知っていただき、障がい者とともに楽しむためのフェスティバルへの参加促進やシンポジウムを開催した。

29

社会包摂
資料価値向上

コロナ禍に対応し、ポストコロナを見据えた事業モデルの開発

ミュージアム活性化実行委員会

大阪歴史博物館

30

地域活性化
先進技術

コロナ禍に対応し、ポストコロナを見据えた事業モデルを開発するため、近隣地域との協働・情報共有により、地域映像アーカイブを共に発展させていくための取組を実施した。また、教育環境利用や創造活動など多方面での利活用を促進し、館蔵資源の価値向上に繋げ、また、感性豊かな人材育成と新たな鑑賞体験を提供した。



玩具や人形に関するコレクションを公開し、未来へ引継ぐプロジェクト

日本玩具博物館

日本玩具博物館

31

観光・産業
先進技術
その他の地域課題



過去の資料を種類別に分類し、デジタル化の優先順位を決定し、第一段階として、アナログ資料のデジタル化と、デジタルデータの分類、データベース投入のためのデータ変換処理を実施した。併せて、連携先である姫路市・姫路観光コンベンションビューローからの後援支援、SNSやホームページでの相互情報発信を行った。また、個人事業主が運営する博物館相当施設は珍しく、文化遺産となるコレクションや研究資料を散逸させずに後世に繋ぐため、法人化を検討した。併せて、博物館有識者、地域で公益活動をされている篤志家、士業関係者、公益事業支援協会からの助言や指導の下、法人化に向けた活動方針を決定した。

発信!どこでもミュージアム

「ヤマト・天理の歴史文化をめぐる」実行委員会

天理大学附属天理参考館

32

多世代
地域活性化
先進技術

博物館の展示室と学校の教室をオンラインで繋ぎ、リモートで展示解説や資料紹介を行った。また、中核館の収蔵品をモデルにしたパーパークラフトを作成し、頒布した。さらに、中核館の周辺に所在する歴史的建造物を見学するツアーを実施し、利用者がどこにいても博物館と繋がることができる新しい関係性を作り出していった。



文化財を未来世代へ:博物館連携強化・多様化事業

和歌山県立博物館

和歌山県立博物館

33

過疎・高齢化
多世代
先進技術



レプリカ製作事業では、3か所の寺社が所蔵する文化財について、県内高等学校・大学との連携によりレプリカを製作し、生徒とともに地区住民へレプリカを手渡して交流を図った。お身代わり仏像製作記録集製作事業では、今年度の製作の全容を詳細に記録し、印刷物および動画(付録DVD)としてまとめた。他の博物館等での実施を検討する材料となるよう、製作に携わった人員や作業期間、具体的な作業工程やその様子を文章・写真・映像によって詳細に記載した。

学校と美術館の連携事業連携2022 みんなの参観日「図工の時間・美術の時間-子どもの学び-」

岡山県立美術館 学校と美術館の連携委員会

岡山県立美術館

34

子ども
多世代
その他の地域課題

必修教科としての「図画工作科」「美術科」の授業を対象とした【授業の展示】、教員にとっては授業の引き出しづくりとなるよう、美術館職員にとっては学校教育の理解の機会となるような【実験的な展示】、図工や美術という教科の存在意義が危うくなっている現在、再度図工や美術の存在意義を参観者に問う【次につながる展示】をキーワードに、小中学校、並びに特別支援学校(小中学部)を対象として参加校を募り、ワークショップ等を実施した。また、今年度は、「交流の場」としてのシンポジウムを開催した。なお、事業を進めるにあたっては、学校と美術館の「双方向性」を重視して行った。



鳥居龍蔵がつなぐ台湾と徳島の文化交流事業

鳥居龍蔵がつなぐ台湾と徳島の文化交流事業実行委員会

徳島県立鳥居龍蔵記念博物館

35

地域活性化
国際
資料価値向上

徳島県内6会場において、鳥居龍蔵が台湾で撮影した写真資料やフィールドノートなどを紹介する移動展示を開催し、展示解説、講演会、出前授業、ワークショップなどの関連行事を行った。また、台湾での鳥居龍蔵の足跡をたどるとともに、彼が遺した資料の価値について、日本および台湾の双方から学術的な検討を加えた国際シンポジウムも開催し、講演要旨集や普及啓発パンフレット、事業報告書を刊行した。



ちくごアートリレーション2022
ちくごアート企画室

ちくごアートファーム計画 実行委員会

福岡県立美術館

2ヵ年計画での美術展開催及び新旧アートサポーターが美術展開催に向けて協働する仕組みの構築を目的とした人材育成事業に着手した。初年度は、次年度に向けてのリサーチ及びプランニングを市民参加型で行った。アウトリーチ活動を行うアートサポーター育成のため、大学生・一般のアートサポーターが講座等を受講し、対話型ギャラリートーク、SNS 発信などの実践に取り組んだ。

また、地域住民・団体とのネットワーク構築のため、アーティストを招聘して実施した展示・ワークショップや、ゲストトークなどに際して、学芸員が地域のニーズに触れるべく、会場に常駐して来場者とのコミュニケーションを会場で図った。



36
子ども
多世代
その他の地域課題

高齢者をつなぐ美術館と医療・福祉施設、
行政機関、公民館、他の博物館との連携事業

学校法人中村産業学園

九州産業大学美術館



様々な連携を通じて地域資源を活かし地域の人々の健康寿命の増進につなげることを目的とした事業を展開した。認知症患者とその介護者を対象とした鑑賞プログラムの開発と実践等の地域の医療・福祉施設、行政機関との連携事業や、遠方への外出が困難な地域住民を主な対象とした、美術館と公民館を結んでのオンライン鑑賞会の開催を行った地域の公民館との連携事業、さらには高齢者を主な対象とした多様な博物館体験の機会を創出するアートバスツアー、ワークショップを開催し、他の博物館との連携を図った。

37
過疎・高齢化
社会包摂
その他の地域課題

様々な連携を通じて地域資源を活かし地域の人々の健康寿命の増進につなげることを目的とした事業を展開した。認知症患者とその介護者を対象とした鑑賞プログラムの開発と実践等の地域の医療・福祉施設、行政機関との連携事業

学校とミュージアムの共創
～平和教育と鑑賞プログラム開発～

学校と共創する美術で学ぶ 平和教育実行委員会

長崎県美術館

美術館と小中学校が連携し、教員が主体となって実践できる授業案作成を協働した。また教員向けの講演会やシンポジウムを開き、鑑賞教育と平和教育の関連性を論理的に整理する機会とした。さらに遠隔地域への手立てとして鑑賞ツールを大学と協働開発し、鑑賞授業（遠隔教育授業含む）にて活用した。また離島地域に所在する博物館と連携し、小学生がロボットを介して交流するプログラムを実施した。



38
子ども
先進技術
その他の地域課題

阿蘇地域の博物館等施設連携による
学習機能強化推進事業

阿蘇火山博物館

阿蘇火山博物館



阿蘇火山博物館が中核となり、阿蘇地域の博物館、資料館などの社会教育施設、及び学校教育関係者による「博物館等の機能強化委員会」を立ち上げ、各施設の収蔵資料や情報の抽出、阿蘇で学ぶことのできるテーマと学習指導要領との紐づけ等、学校教育の中で使いやすい学習プログラム開発のための調査・意見交換を行った。それをもとに、各施設が持つ実物資料を入れ込んだ「学習パッケージ」を3セット作成した。さらに、熊本市内の3つの小中学校と学習パッケージ及び各施設、周辺のフィールドを使った学習活動を実施し、事後には学校や関係者に対して、次のステップに繋げるためのアンケート調査を行った。

39
多世代
地域活性化
資料価値向上

アートで解決する交流拠点プロジェクト

熊本市現代美術館

熊本市現代美術館



熊本市現代美術館のアートラボマーケットを、地域の課題を共有する場として育てるとともに、様々な市民や団体とともにそれらをアートで解決する活動を実施した。まず、専門家の協力のもと、人が入りやすくゆったりと過ごせる場として再設計し、家具の配置、サイン等を見直すことで、市民が何気なく普段使っている場としてリニューアルした。また、子育て世代の居場所づくりや、アート思考の醸成、国際交流や、他団体・多分野の協働事業では、美術館という特性を生かし、市民が手を動かして、何かを共に作りあげることで「楽しいと思える」心の動きを追求するワークショップやプロジェクトを行った。

40
多世代
社会包摂
持続可能性

水俣病学習素材の発掘と教育コンテンツ化

一般財団法人水俣病センター 相思社

一般財団法人水俣病センター相思社

教育関係者に水俣病学習における課題やニーズのヒアリングを行い、水俣を撮影した写真家や、水俣病を伝える活動を実施している関係者、教員らと意見交換を行って、地域内に点在する水俣病学習の素材（写真、館所蔵資料、書籍、アクティビティ等）を整理した。また、資料の保存や権利についての勉強会を行い、ニーズと整理した学習素材を生かし、授業や教育現場で使えるコンテンツ（写真、紙芝居、ワークショップのセット等）を制作して、オンラインでの公開や貸出など、広く活用できる状態に整えた。



41
過疎・高齢化
子ども
多世代

OPAM 芸術と他分野の融合による
新たな人材育成事業

**公益財団法人 大分県
芸術文化スポーツ振興財団**

公益財団法人 大分県芸術文化スポーツ振興財団

42
子ども
多世代
資料価値向上

「美術による人材育成」を目的に、他分野、多分野を融合し、STEAM 教育の観点を取り入れた事業を実施した。第一線で活躍している美術家などを招聘し、文化の担い手である中・高生を対象に制作活動及び制作物の展示を行った。全国の歴史系博物館の学芸員等を講師に招き、地域にとって身近な素材である「糸・布・衣」をテーマにレクチャー、博物館の資料展示、並びに芸術家によるインスタレーションを行った。また、美術家や有識者等を招聘し、制作過程のレクチャーやワークショップや自然史系博物館の研究員を講師に招き、大分県内にあるモノ（石などの地域資源）を「見る・観る・視る」講座を開催した。



琉球伝統文化の継承と在来家畜の保存を
目指した「琉球競馬ンマハラシー」事業

公益財団法人 沖縄こどもの国

公益財団法人 沖縄こどもの国

43
多世代
地域活性化
観光・産業



琉球競馬ンマハラシーに関する文献調査、過去の経験者を対象に聞き取り調査を行うとともに、これらの文化的価値について学術的に検討し、得られた知見は報告書として出版を行った。また、「琉球競馬ンマハラシー」を通じたシンポジウムを開催し、有識者や経験者、イベント実施者、地域の在来馬の保存を行っている団体と共に在来家畜の活用、観光資源としてのンマハラシーについて考える場を設けた。また、イベントではンマハラシー競技を沖縄県馬術連盟と連携して開催した。このほか、競技以外にも当時の様子を再現し、沖縄の歴史・文化を普及するためのワークショップ、乗馬体験などの体験プログラムも実施した。

**ネットワークの形成による
広域等課題対応支援事業に
取り組んだ7事業を紹介**

東北発 博物館・文化財等防災力向上
プロジェクト

**東北発 博物館・文化財等防災力
向上プロジェクト実行委員会**

岩手県立博物館

01
社会課題
広域連携
防災

陸前高田市の歴史的アイデンティティ再構築のため、吉田家住宅の復旧を映像化し、専門家や市民と協力して吉田家文書のデータベースを作成。日本博物館協会東北支部を通じて、博物館や文化財の防災に関する情報交換を促進するとともに、東北大学災害科学国際研究所と連携してオンラインマップを作成し、自然災害リスクを可視化し、共有する体制を構築。博物館・文化財の防災に関する情報を一元的に発信するプラットフォームを整備し再生した博物館のオンラインツアーを提供するとともに同様のテーマの展覧会を実施。成果を国内外に発信し、ファンドレイズや新たな文化観光資源の創出を目指した。



新学習指導要領に対応したプラネタリウム
学習投映の検討及びコンテンツ制作

**新学習指導要領に対応したプラネタリウム
学習投映検討・制作実行委員会**

仙台市天文台

02
広域連携
人材交流
アーカイブ共有

全国6か所の博物館におけるプラネタリウム学習投映を共有するとともに、そのエッセンスを可視化することによりブラッシュアップを行った。それを受け、学習指導要領に対応した学習投映プログラム及び学校で一人一人の児童生徒が持つタブレット等でその内容を予習や復習ができるコンテンツを制作。また、そのプログラムやコンテンツが学習課程の中で、どのように活かせるかも検討し、学校との連携強化を図れるようにした。



文化資源=浮世絵を活用した
国際文化交流・普及事業

千葉市美術館

千葉市美術館

03
社会課題
人材交流
価値の創造



千葉市美術館及び山口県立萩美術館・浦上記念館で、浮世絵普及のためのイベントを開催し、広く浮世絵に親しみ、その技法を学ぶ機会を提供した。所蔵浮世絵については、解説については、英訳をつけて内外の知識欲に応じるべくデータベースを整備し、公開した。また国内での所蔵が少ない浮世絵師鳥文斎栄之を取り上げ、その作品目録を出版した。

メタバース美術館の構築事業

メタバースミュージアム事業 実行委員会

公益財団法人 大谷美術館

04

広域連携
価値の創造
アーカイブ共有



大谷美術館所蔵美術作品の高再現度の複製品を作成し展示するとともに、デジタルデータを利用したメタバース空間でも展示し、リアルとデジタルによる展示を同時に鑑賞できるようにした。加えて、セミナーを開催し、一般参加者や学生・学校生徒に体験の場を提供し、それぞれの違いについての意見交換を行い、各鑑賞方法の利点を分析した。また、デジタルコンテンツを連携館と共有し、ネットワーク形成を行った。これらの事業で得た新たな知見について公開し、新しいIT手法やメタバース内でデジタル作品を体験できる機会の提供に繋げていった。

自然史デジタルミュージアム推進事業

西日本自然史系博物館 ネットワーク

大阪市立自然史博物館

06

人材交流
アーカイブ共有
国際ネットワーク



自然史標本 DX 化のための各館が持つ技術をレビューしたうえで戦略策定を検討し、資料デジタルイメージング拠点整備を行い、運用を開始した。また、標本画像撮影後、データの画像からの自動読み取りによる自動取得及び市民参加型のオンラインプラットフォームの実現に向け、アプリを開発し、実際の運用に向け使用テストを行った。併せて、実践的研修として学芸員への情報共有、対応能力底上げのための研修・技術交流を進めた。研修はできるだけ YouTube などで行い、参加館メンバーに限らず、多くの博物館学芸員の参考になるようにした。

舞鶴市世界記憶遺産を活用した地域づくり
未来づくり事業

舞鶴市世界記憶遺産保存活用 推進委員会

舞鶴引揚記念館

05

人材交流
アーカイブ共有
国際ネットワーク

ネットワーク形成と国際ブランド推進事業では、東京丸の内において平和祈念展示資料館と合同で企画展を開催し、引揚げやシベリア抑留に焦点を当て、地域の歴史を紹介した。学校教育との連携事業では、沖縄で次世代向けのワークショップを開催し、沖縄の語り部や琉球大学の学生と舞鶴市の中高生語り部が「国際平和」をテーマに活動。次世代への継承と人材育成を促進した。また、首都圏の教員向けにモニターツアーを開催。修学旅行の行先に関する情報提供活動を行い、舞鶴市が修学旅行での行き先の1つとなることができるかを検証した。



OPAM グローカルネットワークによる
機能強化事業

大分県立美術館

大分県立美術館

07

社会課題
人材交流
国際ネットワーク



将来の文化の担い手である園児、小・中学生や高校生、児童生徒を指導する先生などを対象とした、学校教育との連携や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動、また、学校と美術館を往還するワークショップ等を行った。また、ウェールズの文化風土やウェールズ国立博物館などを紹介する展示・イベント企画の実施や、ウェールズ国立博物館のコレクションを活用した展覧会等の開催に向けた協議や調査等をオンラインミーティング、現地訪問、招聘を通じて行った。



Pick up

地域課題対応支援事業及びネットワークの形成による広域等課題
対応支援事業の中から注目する取組をPick upしました。

01

地域課題対応支援事業

地域活性化
観光・産業
先進技術

中核館： 山形大学附属博物館

実行委員会： **山形アーカイブ実行委員会**

事業名： **地域の記憶「共創」アーカイブ事業**

構成団体： 山形まちづくり株式会社、山形市、公益財団法人山形市文化振興事業団、山形文化遺産防災ネットワーク、
チェントロ・ポルティコ研究会

事業目的

刻々と変化を遂げる山形市の中心市街地の資料と風景と人々の証言、そして地域の博物館が収集してきた資料などをデジタル化して山形市民だけでなくさまざまな人々と共有することによって、中心市街地の活性化、文化観光の推進、国際交流、次世代教育への活用、文化遺産の防災などの地域課題の解決の糸口をつくることを目的とする。

課題意識

急激な変化にさらされている山形市の中心市街地には、この変化を記録して後世に残したいがノウハウがなくて困っている市民がいる。そして、大学には社会に関わるスキルを身につけたい大学生がいる。博物館の本来機能をもちいて、両者と共に「まちの記憶」を保存し、活用できるデジタル・アーカイブやイベントなどをつくることは中核館である山形大学附属博物館にしかできないことである。そして、今収集している写真や証言は、人口減少によって地域社会の在り方を見直しせざるを得ない時期に地域を振り返るうえで貴重なデータになる。

現状の認識

学生サークル「まちの記憶を残し隊」の結成、山形市内の博物館資料等を公開する「山形アーカイブ」の構築、まちの記憶を保存する意義を発信するイベント「ななはく！」など、市民・大学・博物館の関係構築は進みつつある。

目指すべき将来像

市民と大学と博物館が、それぞれの立場を尊重し、それぞれの強みを活かし、弱みを補い合いながら、地域社会の活性化に寄与できる関係の構築。

本事業で工夫した点

関係構築のためには相互理解を進めることが不可欠である。実行委員会の構成団体の一つである山形まちづくり株式会社と毎月意見交換を行い、本実行委員会が残すべきまちの記憶やその方法について話し合いの場をもった。持続可能なデジタル・アーカイブ構築（オープンソースの活用、365日24時間安定提供を放棄など）を目指した。

文化庁からの コメント

地域の歴史や文化を将来に伝える博物館の収集対象は物理的なモノだけではなく、風景や記憶のような実体を持たないものも含まれます。意識しなければ日々の暮らしのなかで変化し失われてしまう風景や記憶について、地域の団体や大学生との協働により、アーカイブとして保存する意欲的な取組です。

事業の取組内容

デジタルアーカイブ構築(「山形アーカイブ」)

中核館である山形大学附属博物館と構成団体である山形市の山形市郷土館および公益財団法人山形市文化事業団の最上義光歴史館の資料の一部を紹介するデジタルアーカイブを構築した。今後「まちの記憶を残し隊」が収集した山形市中心市街地の風景や人々の語りなども掲載予定。

(1)まちの記憶を残し隊資料収集

小幡圭祐(山形大学人文社会科学部准教授)の担当する授業の履修生や人文社会科学部の学生有志を中心に「まちの記憶を残し隊」を結成し、まちの景観やそこに生きる人たちの証言を収集した。



(2)山形アーカイブ(共創アーカイブ)構築

まず手始めに、山形大学附属博物館所蔵資料約700点、山形市郷土館所蔵資料約200点、最上義光歴史館所蔵資料20点をデジタル化して公開した(2023年3月31日(金)現在)。まちの記憶を残し隊が収集した画像などは次年度以降公開予定。山形大学附属博物館と包括的連携協定を締結した合同会社 AMANE と、古地図ビューアライブラリ「Maplat」を開発した「Code for History」の協力のもと、過去の地図と現在の地図を比較できる地図アプリも構築し、「山形アーカイブ」に登録した。



■URL:<https://cherry.yum-archives.net/yamagata-archive/>



■地図アプリ:<https://cherry.yum-archives.net/maplat/>



ななはく!(まちの記憶を残し隊報告会)

山形まちづくり会社と協力して町の記憶を残し隊が収集した「記憶」を展示・報告するイベント「ななはく!」を実施した。

(1)ななはく!まちの記憶市

2022年9月17日(土)~19日(月) 参加者240人



(2)ななはく!まちの記憶を聞く会

2022年10月23日(日)、30日(日) 参加者17人



(3)山形市主催「山形舞子と花小路秋まつり」

2022年11月12日(土)、13日(日) 展示協力



(4)ななはく!まちの記憶市 2023 ソーレ

2023年2月10日(金)~12日(日) 参加者322人



取組による成果

デジタル・アーカイブの登録件数は、山形大学附属博物館所蔵資料約700点、山形市郷土館所蔵資料約200点、最上義光歴史館所蔵資料20点。アーカイブ公開は4月1日(土)(予定)のためアクセス数は未計測。デジタルアーカイブの普及イベント「ななはく!」は3回実施。参加者ののべ人数は579人。そのうちアンケート回答者数は178人で、約30%の高い回答率を示した。自由記述欄は大学生の参加に対する称賛と事業計画を望む声が多数を占めた。構成団体以外に、記憶を聞く会話者3名、記憶の証言協力者11名、アーカイブへの資料提供への申出者4名、所蔵資料に関する相談者3名。山形市民がまちの歴史に対する関心の高さや風景や記憶が失われる危機感を持っていることが確認できた。また、山形市の観光振興(料亭文化の発信)などの中核館が学術的に協力するなど連携関係も順調に構築することができた。

今後について

さまざまな主体との協働は実現できつつある一方、小学生向けの教材開発について検討した結果、デジタルアーカイブの活用が必要となり、次年度も継続することとした。また、山形大学 VR 部と協働し、登録有形文化財の建物の撮影などを実施したが成果物は作成できなかったため、今後の課題として検討していく。

02

地域課題対応支援事業

社会包摂
先進技術
その他の地域課題

中核館： 金沢21世紀美術館

実行委員会： 公益財団法人金沢芸術創造財団

事業名： 「lab.5 ROUTINE RECORDS」展

構成団体： 株式会社ヘラルボニー、金沢大学附属特別支援学校、特定非営利活動法人 地域支援センターポレポレ

事業目的

「ともに生きる」ために

- 知的に障害のある人と社会をつなぐ
- 美術館の展示体験を通じて、知的障害の認知に前向きな変化を起こす
- 聴覚に障害のある人が音の展示に親しむためのアクセシビリティ向上

課題意識

- 中核館の使命

本事業の中核館である金沢21世紀美術館は、「誰にとっても来館しやすい、楽しい美術館はどんな場所？」というテーマについて、地域の人々とともに行動したいと考えている。

- 社会と地域の課題

知的に障害のある人を身近な存在だと認識できない、「会ったことがない・知らない・わからない」状態が、無意識の「差別」につながっている。

現状の認識

多様な在り方を認め合うためには、障害者差別解消法で奨励されている「障害のある人もない人も人格と個性を尊重し合いながら共生する」ことが大切である。「lab.5 ROUTINE RECORDS」展は、知的に障害のある人が日常で習慣的に繰り返す行動から生まれる音や言葉を音楽として届ける実験的な展示だった。協力団体の特別支援学校や福祉施設の関係者、そして展覧会の内容に親近感を覚える当事者グループの来場風景に触れ、上述の「市民」という言葉を「多世代かつ多様な人たち」であると再認識した上で、企画を見る（観客）・見せる（企画運営者）・参加する（出演者）人たちが、文化芸術を通じた社会参加を自分事として捉え、行動する機会の拡充が必要である。

目指すべき将来像

石川県金沢市に位置する金沢21世紀美術館は、2004年の開館以来、「まちに生き、市民とつくる、参画交流型の美術館」として、市民や様々な組織との連携活動に取り組んできた。2024年に開館20周年を迎えるにあたり、人々の多様な在り方を認め合える全員参加型の社会の一翼を担う公共施設として、次の3点を中長期的な視点で実現したいと考えている。

- 1) 魅力ある企画の実施・発信に加え、地域連携の相乗効果により、まちなかに賑わいを創出する。
- 2) 多くの市民が積極的に関わりながら交流を深め、実演芸術の企画運営・表現・鑑賞を行っている。
- 3) 多くの市民により多様性が尊重され、文化芸術を通じた社会参加がなされている。

本事業で工夫した点

- 3つの連携先

福祉実験ユニット・ヘラルボニーは知的に障害のある人たちによる平面作品の展示販売などに取り組んできた。今回は「彼らの日常を音楽へ」というメッセージを掲げ、全国5箇所に住む13名の知的に障害のある人へ協力を依頼した。金沢市内の2つの協力団体：金沢大学附属特別支援学校とNPO法人地域支援センターポレポレは、数度に渡り会場を訪問した。

- 新たなクリエイションが知的障害の認知に前向きな変化を起こす

従来の絵画や彫刻などではなく、知的に障害のある人が「ただそこにありのままでいられる日常」において習慣的に繰り返す行動から生まれる音や声を聴取し、それを音源として音楽や表現に結びつけることで、鑑賞者へ「ルーティン音がある日常」への新しい着眼点を提示した。

- 半年間の展示と活動を通じた交流の場の創出

「lab.リサーチサポーター」と題したボランティア10名は、「わからないから始めよう」を合言葉に展示体験や対話を重ね、特別支援学校や福祉施設の団体対応や、地元で活躍するDJとともにDJブースの体験充実を図る企画を実施した。

文化庁からのコメント

多様な人々による共生や社会参加を進めるためには、それぞれの人格や個性を認め合い、尊重することが不可欠です。知的障害のある人の発する音をアートとして再構築した本事業は、無意識の差別を軽やかに乗り越える新たな視点や認知を生み出しました。

事業の取組内容

福祉とアートの新しい可能性を試みる気鋭の福祉実験ユニット「ヘラルボニー」による新しいプロジェクト「ROUTINE RECORDS (ルーティンレコーズ)」を紹介した。

本プロジェクトは、知的に障害のある人が習慣的に繰り返す日常の行動から生まれる音や言葉を音源にして音楽として届ける試みで、制作・展示・調査研究の3つの要素で構成された。

制作:ルーティン音の聴取

協力施設と個人 (5施設13名)
…アトリエやっほう!! (京都府)、
金沢大学附属特別支援学校 (石川
県)、さぶらん生活園 (愛知県)、
地域支援センターポレポレ (石川
県)、松田翔太 (岩手県)、やまな
み工房 (滋賀県)



金沢大学附属特別支援学校

展示:「lab.5 ROUTINE RECORDS」展

会場: 金沢21世紀美術館デザインギャラリー

会期: 2022年10月1日(土)~2023年3月21日(火・祝) のべ143日間

来場者: 83,962名

構成: 16種類のルーティン音
の展示、聴取風景の映像、DJ
ブース、ルーティン音から生ま
れた楽曲の視聴



photo: Akifumi Nakagawa

調査研究

(1) 関連プログラムの実施

- ・協力施設関係者とのトークプログラム (10月・1月)
- ・インクルージョン研究者・野口晃菜を交えたオンライン座談会 (11月)
- ・地元DJのパフォーマンスと lab. リサーチサポーターによる鑑賞体験サポート (1月~3月)
- ・展覧会のテーマに沿った絵本の読み聞かせ後、光と振動で音を感じ取るデバイスを使った展示体験を実施 (2月)
- ・関係者によるトーク、展示参加者の紹介、DJブースを監修したDJと自閉症とともに生きるラッパーのパフォーマンスを最終日に実施 (3月)



鑑賞体験サポート

(2) 聴覚に障害のある人が音の展示に親しむためのアクセシビリティ向上

- ・音を光や振動で感知できるデバイスOntennaを活用
- ・トーク会場に手話通訳者を配置し、記録動画に日本語字幕を設置

(3) 展示体験の評価

- ・トークとパフォーマンス参加者へのアンケートの実施
- ・プロジェクトボランティア「lab. リサーチサポーター」による活動 (10名のボランティアが特別支援学校や福祉施設の団体来館対応、来場者の体験サポートや聞き取り調査を実施)
- ・記録集の作成と美術館ウェブサイト上での公開

https://www.kanazawa21.jp/files/lab.5_ROUTINE_RECORDS_2022.pdf



福祉施設の館内散策と展示体験サポート (12月)

取組による成果

●知的に障害のある人の新たなクリエイションが起こす変化

従来の絵画や彫刻といったメディアではなく、知的に障害のある人が「ただそこにありのままにいられる日常」において習慣的に繰り返す行動 (ルーティン) から生まれる音や声を聴取し、それを音源として音楽や表現に結びつけることで、鑑賞者へ「ルーティン音がある日常」への新しい着眼点を提示した。

●半年間の展示と活動を通して、出会いと交流の場を創出する

本事業のテーマに共感し、展示や活動を共創する人として「lab. リサーチサポーター」の名称でボランティアを募集したところ、20代から70代の10名が参集した。「わからないから始めよう」を合言葉に何度も展示体験や対話を重ね、特別支援学校や福祉施設の団体来館対応や、DJブースの体験充実を図るプログラムを地元で活躍するDJと実施した。

今後について

2023年秋、石川県では「いしかわ百万石文化祭 2023 (国民文化祭、全国障害者芸術・文化祭の統一名称)」が行われた。全国障害者芸術・文化祭は県内初開催ということもあり、障害のある人もない人もともに参加し、交流の輪を広げる機会が県内全域に広まった。公共の文化施設として、今後は展示に加えてパフォーマンスアーツなどでも地域との連携を推進し、ネットワークを拡充しながら芸術文化活動による社会包摂の継続と活性化を目指す。

03

地域課題対応支援事業

社会包摂
資料価値向上

中核館： 大阪市立自然史博物館

実行委員会： **M3プロジェクト実行委員会**

事業名： **M3 (Motto Minna no Museum) プロジェクト**

構成団体： 大阪市立東洋陶磁美術館、地方独立行政法人大阪市博物館機構、大東市立歴史民俗資料館、高槻市立自然博物館（あくびあ芥川）、大阪市長居障がい者スポーツセンター

事業目的

様々な障がいがある人々の中で、今年度は特に視覚に障がいのある方、発達障がいのある方を対象とする取り組みを中心に実施する。対象の方々が博物館を楽しめるようなプログラムや利用環境整備の工夫を試し、そこで得た知識や改善点を各地の博物館に技術移転し、普及させられるように取りまとめることを目的とする。合わせて、意識改革と相互協力を広げていけるよう、ネットワーク活動の充実を図る。

課題意識

博物館法が文化芸術基本法の精神を取り込む中で、社会的包摂はますます博物館の重要な取り組みになっている。建物などのバリアフリー化は進みつつあるが、視覚障がい者や車椅子利用者、あるいは多様な言語背景を持つ方々が、館内を安全に迷いなく歩けたとしても、博物館の展示を楽しむ事ができるようにする工夫はまだ十分ではない。現状では博物館がすべての人々が学び楽しむ場となっているとは言えない状況である。

現状の認識

現状の自然史博物館は開館後まもなく50年を迎えるが、大規模な展示更新や建物や設備の改修は1986年以降行われていない。1986年以降、複数回の障害者基本法の改正や、障害者差別禁止法、バリアフリー法の制定などがあり、社会の障がいに対する認識が大きく変化し、「障害の社会モデル」と呼ばれる考え方が浸透しつつある。博物館の側も、働く人の知識や認識のアップデートをし、障がいのある人にも利用しやすいような展示・施設・建物の更新に備える必要がある状況であると考えている。

目指すべき将来像

障がいの有無にかかわらず、あらゆる人が博物館の展示を安全に利用ができ、また普及行事にも安全に参加できる状態を実現し、そこから知識を得たり楽しく学んだり場を共有できるようにする。博物館が学びや楽しみのために利用できる場として、あらゆる人に認識され、気軽に利用されるようになる。

本事業で工夫した点

特筆すべき工夫した点はない。当たり前のことをしただけである。連携した各館が課題だと感じている事柄に対し、それを解決する方向での研修を提案し、近隣の館にも広報して館員からの参加を募った。研修の講師の多くが、これまでに博物館界の周辺で障がい者支援の先進的な取り組みをしてきた方、各館の活動を通じて知り合いになった障がい者を支援する団体や個人である。障がいのある人を対象としたプログラム開発でも同様である。

文化庁からの コメント

博物館をあらゆる人々に開くためには、利用の障壁の解消や、博物館をより豊かに楽しむためのプログラム開発が必要です。当事者である障害のある人を交えたワークショップによって検討を進めることで、視点の共有とネットワークの構築が推進されたことは、今後も継続される取組に資するものが大きいと考えます。

事業の取組内容

視覚障がい者に博物館を豊かに楽しんでもらうためのプログラム開発と試行

(1) 収藏品レプリカに触って楽しんでもらうプログラムの工夫と試行

① 3D データ・3D プリンター活用のための研修

2022年11月15日(火)に大阪市立自然史博物館(以下、自然史博物館と略す)で実施。参加者10名。講師は黒部市吉田科学館の野寺凜学芸員。3Dデータ・3Dプリンター活用事例の講演に続き、講師の指導のもと3Dデータを作成し、3Dプリンターでの出力を試みた。

② 美術品レプリカ制作と触察ワークショッププログラム開発

2023年3月5日(日)に自然史博物館で、カラフルアート・ワークショップ「さわってみよう東洋陶磁」を、東洋陶磁美術館学芸員、ちゃめっこ・はくぶつかんスタッフにより実施。午前には視覚障がい当事者2名、付き添い2名、午後は視覚障がい当事者4名、付き添い2名が参加。本事業で作成の加彩婦女俑と油滴天目茶碗のレプリカを使用。



(2) プログラム改善のための意見交換会(上記②の事前のモニターワークショップ・実施後の聞き取り)

プログラム案改善のためのモニターワークショップを1月28日(土)に実施予定だったが、悪天候により2月13日(月)にモニター1名で実施。もう1名のモニターには3月5日(日)のワークショップ本番に参加いただき、ワークショップ後に意見を伺った。レプリカの素材(磁器・樹脂・陶器)ごとに触察で分かること、分からないことをご教示いただいた。実物に近い素材で全体の質感を知り、詳細な形の把握には樹脂製レプリカで行うなど、目的に応じて素材を選ぶ必要があることが明らかになり、これらの意見をもとにプログラムを完成させた。



発達障がいのある利用者のためのプログラム開発と研修実施

(1) 発達障がいのある利用者のための博物館を楽しむプログラムの開発と実施

2022年12月17日(土)・18日(日)に、大阪市長居障がい者スポーツセンターのクリスマスイベントで、てぼこさんとはくぶつかんによるワークショップを実施し、2日間で延べ98名の参加があった。博物館や自然に関係があり、かつクリスマスイベントにふさわしい図柄のバッジかエコバッグを選択して作成できるようにした。各種の障がいのある人に配慮した作業過程や材料の配置を行った。



(2) 発達障がい者への理解とより良い施設利用を促すための講演会と研修

① 障がいへの理解促進のための講演会

2023年2月23日(木)に大阪市長居障がい者スポーツセンターで、精神科医の三家英彦先生を講師に講演「"自律神経"がキーワード - 「好き」が整えていく心」を対面とYouTubeライブ配信のハイブリッドで行い、対面で44名、配信で23名が聴講した。3月2日(木)～20日(月)の間YouTube長居障がい者スポーツセンターチャンネルで見逃し配信を実施、450回の視聴があった。

② やさしい日本語とソーシャルストーリーガイドについての研修

2023年1月23日(月)に多摩六都科学館の高尾戸美氏を講師に招き、高槻市立自然博物館で対面で実施予定であったが大雪によりZoom配信に変更、19名が参加した。講演に続きグループワークでやさしい日本語でのパネル文案作成やソーシャルストーリーガイド作成を試行。後日最寄りバス停から高槻市立自然博物館へのソーシャルストーリーガイドのWEBページを作成した。

③ ソーシャルナラティブとセンサリーマップについての講演会

2023年3月10日(金)に三重県立美術館の鈴木麻由子学芸員を講師にオンラインで実施、20名が参加した。ASDや感覚過敏のある利用者安心して来館してもらえるためのソーシャルガイドやセンサリーマップの自館での作成プロセスや、国内外での事例を紹介いただいた。YouTube公開後10日間で121回の視聴があった。

<https://www.youtube.com/watch?v=dYJUxgHeEoc>



取組による成果

触察用の美術品レプリカと触察ワークショッププログラム、大阪市立自然史博物館の点字版展示見学ガイド、展示項目リスト(点字版、墨字版)、発達障がい等のある人を対象としたワークショッププログラム、高槻市立自然博物館への来館方法を示したソーシャルストーリーガイドが完成した。大阪市立自然史博物館の触察案内図の試作を行った。障がい当事者を含む市民を対象としたワークショップ・講演会には延べ627名、博物館関係者が対象の講演会・研修には延べ440名(以上、オンラインでの後日配信含む)、大阪自然史フェスティバルには17,300名の市民の参加があった。博物館関係者が障がい者スポーツセンター、障がい当事者、障がい者支援団体と結びつくことができ、大阪周辺での博物館の社会包摂的な取り組みの機運を創出できた。

今後について

本事業により、まずは連携する各館がそれぞれ活動するきっかけを作れたと考える。各館が緩い連携の下でより自主的に活動し、障がいの有無を問わずあらゆる人々が博物館を楽しく利用できるように、博物館員やその周辺で働く人が学びを深め、展示や施設の改修の機会に知識や経験を活かせるようになれば良いと考える。また、障がい当事者を対象としたプログラム開発や実践を重ね、いずれは当事者にも博物館運営に関わってもらえれば、冒頭に書いた「目指すべき理想像」の実現に近づくことができると考える。

04

地域課題対応支援事業

子ども
多世代
その他の地域課題

中核館： 岡山県立美術館

実行委員会： 岡山県立美術館 学校と美術館の連携委員会

事業名： 学校と美術館の連携事業連携
2022 みんなの参観日「図工の時間・美術の時間-子どもの学び-」

構成団体： 岡山県小学校教育研究会図画工作部会、岡山県中学校教育研究会美術部会、岡山大学大学院教育学研究科

事業目的

すべての子どもたちが、文化的で豊かであることを目指す学校と美術館の共働プログラムで、双方の連携のさらなる推進を図り、ともに地域や社会に開かれた姿を目指す。

課題意識

学校と美術館がともに開かれた姿を追求する機会の一つとして「みんなの参観日「図工の時間・美術の時間-子どもの学び-」（以下、「みんなの参観日」）の構想が生まれ、美術館が持つ機能そのものを見直し、新しい機能を生み出す一つの形として2019年度から「みんなの参観日」を継続実施している。昨年度3回目の事業を終えて、コロナ禍で開催する意味、図工・美術の時間や今を生きる子どもたちへの理解、また学校と美術館が共働する意義など、参観者一人ひとりの中に自ずから湧き上がって来たコメントが参観者アンケートに多く寄せられた。このことから、本事業が、地域や社会と「学校教育課程」、並びに「美術館活動（これからの博物館に求められる役割 / 文化審議会博物館部会 令和3年7月）」の結節点としての「交流の場」になる可能性があると考え、第4回実施では、交流の場としてのシンポジウム開催をはじめ、アクティビティの一層の充実に努めた。

現状の認識

岡山県立美術館では、学校と美術館の連携委員会（2010年度）を発足させ、小中高等学校、並びに大学等と共働しながら、子どもたちが本物と出合う様々な事業を実施している。2017年度に開催したシンポジウムでは「ミュージアムが学校を開く扉になる可能性がある」、そして、当館の運営協議会では「美術館を社会や地域に開いていく一つの形として、学校との連携は重要である」とのご意見をいただく。

目指すべき将来像

「みんなの参観日」は、図工や美術の時間の中で大切にされている子どもの思いや主題、先生の支援や子ども同士の関りを切り口とした「子どもの学び」を美術館に展示して、地域や社会の「みんな」が、参観することができる場である。また、学校と美術館の双方向やり取りを重視し、互いに共感しつつ高め合うことができる場でもある。このような「みんなの参観日」が目指す将来像は、地域や社会に学校を開くと同時に、地域や社会が学校を知る機会の一つになることである。そして、社会教育施設という美術館が、学校と共働することをとおして《もの》と《人》と《こと》をつなぐ結節点になり、地域や社会のあたたかいまなざしを涵養する場になることである。

本事業で工夫した点

以下の3つをキーワードに、学校と美術館の双方向性を重視して行った。

【授業の展示】全児童生徒が履修する必修教科としての図工・美術の時間を、子どもの学びの姿を切り口に展示した。

【実験的な展示】「みんなの参観日」会場（美術館）で公開授業を開催。学校の授業を美術館で行うことにより、学校の教育課程を広く一般に開くことを試みた。また、参加校の先生によるワークショップを開催。参観だけにとどまらず、参観者が授業を体験することをおしてより交流が深まるよう試みた。さらに、年齢も立場も異なる様々な人々が積極的に交流する場としてシンポジウムを開催した。

【次につながる展示】参加校の児童（有志）が自ら展示に関わり、「展示の工夫／学芸員との交流」をテーマに学校団体観覧も実施。その後児童は、「学校まるごと美術館」という授業を学校で行った。また、展示会場のアテンドスタッフは、教育学部や学芸員課程を履修している学生に依頼し、参観者との交流をおして本事業の意義を理解し、将来を考える場になるよう試みた。

文化庁からのコメント

本来学校のなかにある「子どもの学び」を美術館で展示することで、地域や社会に学校を開く試み。地域の文化芸術の拠点としての美術館が、その専門性を活かしつつ学校との連携・協働を進めるなかで、教育や学びを地域に開いていける可能性を示しています。今後、より多様な学校との連携が拡大していくことを期待します。

事業の取組内容

みんなの参観日

(1) 展示事業／公開授業／アクティビティ

【前期】- 展示 @ 岡山県立美術館屋内広場 会期：2022年12月4日(日)～12月18日(日) 参観者数：933人

- アクティビティ：みんなの参観日と美術館パブリックプログラムのジョイントプログラム

① 研修会「みんなの参観日×くらしき図画工作の会 + α」

2022年12月10日(日) 10:00～12:00 @ 岡山県立美術館屋内広場 & 研修室

図工の時間を語る交流会(参加校の実践紹介と意見交換) & 美術の時間にチャレンジWS

参加者数：14人(定員10人程度/事前申込先着順)

② WS「みんなの参観日×じゅにあ・ミュージアム・Lab / ここはマスキングテープ島」

2022年12月11日(日) 10:00～12:00 @ 岡山県立美術館研修室 & 屋内広場

美術の時間にチャレンジするWS

参加者数：19人(定員15人程度/事前申込先着順)

③ WS「みんなお参観日×きっず・ミュージアム・Lab / にじんでひろがる わくわく世界」

2022年12月17日(土) 10:30～12:00、14:00～16:00、18日(土) 10:00～12:00

図工の時間にチャレンジするWS

参加者数：15人(定員各回6人/事前申込先着順/当日欠席3人)

【後期】- 展示 @ 岡山県立美術館屋内広場 会期：2023年1月15日(日)～1月29日(日) 参観者数：1,062人

- アクティビティ：みんなの参観日と美術館パブリックプログラムのジョイントプログラム等

① 公開授業「友だちと一緒にひもひもワールド をつくろう」

2023年1月19日(木) 10:00～11:40 @ 岡山県立美術館屋内広場

美咲町立加美小学校1年生26人が、図工の時間をみんなの参観日会場で行った。

② 参加校団体観覧「展示の仕方に注目してみる - 学芸員との交流」

2023年1月23日(月) 10:00～11:00、11:00～12:00、13:45～14:45

岡山大学教育学部附属小学校6年生3クラスが、展示会場で学芸員と交流を図った。

③ WS「みんなの参観日×きっず・ミュージアム・Lab / 消して描く?!」

2023年1月28日(土) 10:30～12:00、14:00～16:00、29日(土) 10:00～12:00

図工の時間にチャレンジするWS

参加者数：17人(定員各回7人/事前申込先着順/当日欠席4人)



シンポジウム

(1) シンポジウム／みんなで語ろう！「図工の時間・美術の時間 過去←現在→未来」

「図工・美術の時間」をキーワードに、年齢も立場も異なる様々な人々と交流する場とした。

日時：2023年1月21日(土) 13:30～15:30 @ 岡山県立美術館ホール

参加者数：71人(定員100人まで/事前申込先着順/欠席7人)

< プログラム >

アイスブレイク _ 体と頭をほぐしましょう！

講演 _ 学校と美術館のお話を伺ってみましょう！

平田朝一氏 | 文化庁参事官(芸術文化担当) 付教科調査官

鬼本佳代子氏 | 福岡市美術館主任学芸主事

交流会 _ みんなで語りましょう！



取組による成果

【授業の展示】【実験的な展示】【次につながる展示】をキーワードに、学校と美術館の双方向性を重視して行った「みんなの参観日」事業は、県内8小中学校(小学校5校、中学校3校)の参加、1,995人(前期:993人、後期:1,062人)の参観者で、第4回目を終えることができました。

【授業の展示】で特筆すべきことは、学校単位(1～6年生)での参加があったことにより、小学校6年間の発達段階に応じた図工の学びを展示できたことである。【実験的な展示】【次につながる展示】では、交流の場としてのアクティビティの一層の充実を図ったことである。初の試みである「公開授業」を、子どもたちが教室を飛び出してみんなの参観日会場(美術館)で開催したことは、学校の教育課程を広く一般に開くという一つの姿になったと考える。また、参加校の児童が、自らみんなの参観日の展示に関わり「展示の工夫/学芸員との交流」をテーマに団体観覧をする取り組みがあった(その後、児童は、「学校まると美術館」という授業を行った)。そして、交流の場としてのシンポジウムでは、学校教育関係者だけでなくとどまらず一市民や学生の参加があり、「子育てと美術」「家庭・学校・美術館、すべてがつながって社会とつながる美術」など、広い視野で交流が生まれた。以上のことから、冒頭に掲げた目指すべき将来像に一歩近づけたのではないかと考える。

今後について

参加校数や地域による格差、特別支援学校の未参加など、参加校の偏りに課題がある。ワーキンググループを軸に過去の参加校とも共働しながら、学校と美術館の双方向性を重視し本事業の趣旨を多くの学校や先生に周知すること、そして「みんなの参観日」期間中実施しているアクティビティをより充実させ「交流の場」を意識することで、目指すべき将来像に近づくと考える。そのためには、本事業を継続実施していくことが肝要である。

05

地域課題対応支援事業

過疎・高齢化
社会包摂
その他の地域課題

中核館：九州産業大学美術館

実行委員会：学校法人中村産業学園

事業名：高齢者をつなぐ美術館と医療・福祉施設、行政機関、公民館、他の博物館との連携事業

構成団体：香椎丘リハビリテーション病院、福岡市香住丘公民館、東第3いきいきセンターふくおか（福岡市地域包括支援センター）、福岡市社会福祉協議会東区社協事務所、福岡市美術館、香椎・香住丘さくらネット、下原ともづくりの輪

事業目的

博物館法の一部改正により、これからの博物館の役割・機能として、地域の多様な主体との連携・協力により、社会や地域の課題に働きかけ、解決に取り組むこと（「つなぐ、向き合う」）も求められる。本事業がそのモデルとなることを目指し、様々な連携を通じて地域資源を活かし地域の人々の健康寿命の増進につなげることを目的とする。

課題意識

地域の医療・福祉施設では、地域資源である博物館を活用したプログラムなどは行われていない。また、医療・福祉関係者と博物館のつながりがほとんどない。本学がこれまで行ってきた博物館と健康をテーマとした調査研究などを、どのように地域社会に生かしていくことができるかが課題である。

現状の認識

福岡市の将来人口推計によると、福岡市の高齢化率は2025年に24.8%、2040年には31.0%となり、中でも後期高齢者人口の伸びが大きくなると予測されている。本学美術館周辺の、東区香住丘、香椎東、下原の各校区は一部の地域で交通の便が悪く、買い物も困難に感じている高齢者が多数いる。また、ワンルームに一人で暮らす高齢者が多い地区もある。これらの地域には、医療・福祉施設、行政機関の関係者を中心に構成されているネットワークがあり、介護の相談をはじめ、買い物支援、公民館での健康づくり教室の開催など、高齢者をはじめ誰もが住みよい地域づくりのための活動を行っている。

目指すべき将来像

地域のあらゆる人々、とりわけ高齢者が博物館を継続的に利用しやすい環境を整える。そのために、博物館と医療・福祉施設、行政機関、公民館等が協力、連携し、地域のニーズにあった参加しやすいプログラムの実施や、情報の発信を行う。

これらを持続的に行うために、例えば、近隣の複数の博物館がプログラムを、期間をずらして実施したり、オンラインの活用など、低コストで多くの方々が参加しやすいプログラムづくりをしたりするなど、実施する側の負担が大きくなりすぎない工夫も必要となる。

また、高齢者と接する様々な立場の人たちと情報を共有し、博物館と高齢者をつなぐリンクワーカー的存在の人たちとの連携、関係の構築を進める。

本事業で工夫した点

新型コロナウイルス予防のため、美術館の職員は病院に直接入らないオンラインによる鑑賞プログラムの開発を行った。写真集やワークシートを事前に病院に預けておき、病院の職員と連携することで、モニターを通して作品を見るだけでなく、写真集のページをめくったり、ペンで絵を描いたりする作業を取り入れた。

美術館と公民館をオンラインでつないでの鑑賞会では、2地域の公民館をつないで同時に行った。さらに外出が難しい方も参加できるように、自宅からの参加も受け付けた。学芸員が一方的に話すのではなく、参加者とコミュニケーションをとりながら鑑賞を進めた。公民館に集まった方には、作品に使われている木の香りを嗅いでいただくなど、視覚以外の感覚を使った鑑賞ができるよう工夫した。貸し切りバスによる美術館訪問では、バスの乗り降りをはじめ、活動に不安のあるかたも安心して参加していただけるよう、病院の職員もバスに同乗し、プログラム全体を通して見守っていただいた。尚、楽しい雰囲気づくりのため、病院の職員にも私服で参加していただいた。

文化庁からのコメント

高齢化という社会課題に対して、医療や介護の関係者とともに検討を進める意欲的な取組。物理的な移動や訪問が難しい高齢者に対して、オンラインプログラムやアートバスツアーを実施することでQOLの向上を図っています。美術館が社会的処方場となるための取組がモデル化され、広がっていくことを期待します。

事業の取組内容

本館と地域の医療・福祉施設、行政機関等との連携による、博物館の社会的処方場としての機能の強化

(1) 認知症患者とその介護者を対象とした鑑賞プログラムの開発と実践

香椎丘リハビリテーション病院(福岡市東区下原)との連携事業として、美術館と病院と協議しながら、入院中の患者(軽度の認知症患者を含む)を対象とした鑑賞プログラムの開発と実践を実施。参加者の気持ちの変化を評価するために、フェイススケールを用いたアンケートを行った。

・鑑賞プログラム1「人形師 中村信喬展を楽しむ」

日時：2022年10月7日(金) 14:00～16:00 (2回に分けて実施。1回約50分)

場所：九州産業大学美術館、香椎丘リハビリテーション病院 (Zoomを使用)

・鑑賞プログラム2「雪を感じる」

日時：2022年12月13日(火) 14:00～16:00 (2回に分けて実施。1回約50分)

場所：九州産業大学美術館、香椎丘リハビリテーション病院 (Zoomを使用)



会場の様子

(2) プログラム開発にあたっての先進事例の調査

日程：令和4年12月1日(木)～2日(金)

場所：①豊明東郷医療介護サポートセンター「かけはし」、ふじたまちかど保健室

②北名古屋市歴史民俗資料館、北名古屋市回想法センター、旧加藤家住宅

(3) 博物館と医療・福祉機関の連携に係る研究会の開催

オンラインプログラムについて取り上げた。プログラムの実施に役立つ、実践的、具体的な内容について、学び、考える機会とした。

・高齢者の健康を目的とした美術館と施設を結ぶオンラインプログラムを考える

日時：令和4年12月16日(金) 20:00～22:15 (日本時間)

場所：福岡、ニューヨーク (Zoomを使用)

参加者：医療・福祉施設関係者、博物館関係者、行政機関、財団関係者、大学院生 (合計21名)

講師：キャロリン・ハルピン＝ヒーリー氏 (Arts&Minds、エグゼクティブディレクター)



他の博物館との連携事業

(1) 高齢者を主な対象とした多様な博物館体験の機会を創出するアートバスツアー、ワークショップの開催

福岡市美術館を会場に、アーティストのオーギカナエさんによるスマイル茶会を開催した。

・めぐる季節のアートバス スマイル茶会へようこそ

日時：令和4年11月30日(水) 9:00～12:00

場所：福岡市美術館

参加者：20名 (九州産業大学美術館周辺にお住いの65歳以上の方が対象)

講師：オーギカナエ氏 (アーティスト)



当日の様子の動画を視聴できます



取組による成果

●本館と地域の医療・福祉施設、行政機関等との連携による、博物館の社会的処方場としての機能の強化

(1) 近隣の病院と連携し、所蔵品を活用したオンラインプログラムを2回実施した。

成果 患者と病院職員の実施前後の気持ちの変化についての調査、記述式のアンケート、動画記録などから、作品の選定の仕方や、環境の整備の必要性など、オンラインプログラムの具体的な課題が見えてきた。

(2) 北名古屋市歴史民俗資料館、回想法センター、加藤家住宅に加え、豊明東郷医療介護サポートセンター「かけはし」、ふじたまちかど保健室にて聞き取り調査した。

成果 連携することで、持続可能な取り組みにしていくヒントを得ることができた。連携先の病院の職員と調査することで、取り組みの方向性等を共有できた。

(3) 地域の医療、福祉、博物館関係者と研究会を実施した。

成果 本館の事業に対する関係機関の理解や、連携に関する関心を高めることにつながった。今後、関係機関が、博物館を社会的処方場としての機能に関心を持つことで、連携の促進、博物館の社会包摂(孤立・孤独対策を含む。)への寄与に結び付くことが期待される。

●他の博物館との連携事業

(1) 福岡市美術館との連携で大学周辺の高齢者を対象としたアートバスツアーを実施した。アーティストによるお茶会や、ボランティアガイドによる展示案内によって、会話を楽しみながらのアート体験を提供した。

成果 アンケート等の結果から、参加者のQOLの向上、ならびに博物館の魅力の向上につながったことがうかがえる。周辺地域をまわるバスを出したことで、移動のハードルを下げることができた。久しぶりに美術館を訪れた方や、思いがけず美術館に行く機会を得た方などがおり、高齢者が博物館に出かける機会をつくるとともに、文化を通じた住民同士の出会いの場を提供することができた。

今後について

病院と連携し、プログラムの開発を継続し、より汎用性のあるプログラムづくりをするとともに、その効果についても検証する。公民館等との連携も継続し、活動の裾野を広げていく方法を探っていきたい。また、将来的には、近隣の博物館と連携するなどして、一度参加した方が、継続的にプログラムに参加したり、博物館を訪れたりできるような環境ができればと考える。

06

地域課題対応支援事業

多世代
社会包摂
持続可能性

中核館： 熊本市現代美術館

実行委員会： 熊本市現代美術館

事業名： アートで解決する交流拠点プロジェクト

構成団体： 下通繁栄会、熊本市、熊本市教育委員会、熊本市立必由館高校、本熊本実行委員会、くま博実行委員会

事業目的

街と美術館をつないできたアーティスト・日比野克彦(熊本市現代美術館館長)の視点を生かし、行政、地域の中にある様々な課題に対して、アートや美術館を糸口として取り組んでいき、クリエイティブな思考をもった市民を増やしていくことが本事業の目的である。

課題意識

コロナの5類移行後、街なかに活気は戻ってきたが、急激なデジタル化の進行により人々の生活様式が変容したのと同時に、周辺店舗もテナントの空きスペースを積極的に休憩所などとして開放していることで、市民の行動様式も変容している。美術館のフリースペースで目指してきた「街なかのサードプレイスとして寛いだ時間を過ごす」だけではない、多様な体験の場が求められていることを実感している。

現状の認識

熊本市現代美術館は上通・下通・新市街と3つのアーケード街が連なる、熊本市の中心市街地に位置する美術館である。草間彌生などのアーティストの作品が配され、無料で利用できる広いフリーゾーンが特徴で、2002年の開館以降、その利便性からも多くの市民に親しまれてきた。しかし、2016年の熊本地震、そして2020年より続くコロナ禍、また2021年には熊本駅前の再開発事業により路面店が駅ビルに吸い上げられ、美術館周辺の商店街は空き店舗が多くみられるようになっている。熊本商工会議所が実施する、商店街通行量調査結果報告書によると、美術館前の通行量はコロナ前の1日7万人を大きく割り込み、4万人台から回復できていない。熊本市が管轄する当館内のカフェも、2016年に撤退後、テナントの入れ替わりが激しくなり、6年間のうち4年間は閉店状態が続き、うまく活用できないままになっている。

目指すべき将来像

熊本市現代美術館は、アートを通じた社会課題の解決や、熊本市の第8次総合計画と市民をつなぐ企画等を実施中である。福祉や街づくりといった市の各局と美術館がネットワーク化し横断・連動することで、市民のウェルビーイングの向上に寄与する文化行政を実現することを中長期的な目的としている。

市民の中に自分とは異なる価値観を持つ人と共生していく寛容性やコミュニケーション力を育み、容易に答えの出ない社会においてもそれぞれのウェルビーイングをめざすことのできる社会の実現を最終的な目的として活動が続けている。

本事業で工夫した点

「創作」「コミュニケーション」「ショッピング」という3つの要素を備えた「アトラボマーケット」というアイデアを現実のものとするために、アーティストや建築家、ショップや美術館スタッフが知恵を出し合い、一体となって運営する「可変的で生きた場」として日々成長している点にある。本年度だけで大小あわせて30以上のイベントやワークショップを実施してきている。

また、そこで日比野館長を中心として行われる「ご用聞き」は、市役所職員とともに地域社会の中でアートをどう機能させることができるかリサーチし、実験していく活動である。これまで美術館活動の中で表立って語られることの少なかった、文化政策としての側面を強化し、互いにアイデアを出しあい、課題解決への手がかりとしてアートや美術館が存在感を発揮していく場を創出することが、本事業で最も工夫した点である。

文化庁からのコメント

街なかにある立地を生かし、創造と交流の場としてのアトラボマーケットを運営することで、クリエイティブ思考を持った市民の増加に繋がっています。あわせて館長による「ご用聞き」では、アートを介在した街のネットワークをゆるやかに構築し、自治体行政のなかに文化芸術拠点としての美術館を位置付けています。

事業の取組内容

熊本市現代美術館を地域の課題を共有し、解決する場に育てる活動

(1)「ART LAB MARKET」視察・指導及び見学会等

①視察、導線等の指導、意見交換

リニューアルに関し建築家の西澤徹夫氏による視察、導線指導、意見交換を行った。

②設計者の案内による関係者見学会、インタビュー

2022年10月12日(水)にリニューアルオープンしたアートラボマーケット及びホームギャラリーの関係者見学会を、西澤氏を講師として、地元の建築家や県の建築担当者などを招いて行い、併せてインタビュー等を行った。



西澤氏による見学会

(2)「ART LAB MARKET」広報 Web ページの作成

①熊本市現代美術館ホームページ内のページ構築・発信

熊本市現代美術館ホームページ内に、新たにアートラボマーケットのページを構築した。同スペース内で行われるワークショップやイベント情報を随時更新し SNS等で発信している。

<https://www.camk.jp/region/alm/>



(3)「ART LAB MARKET」等で行うワークショップやご用聞き

①ワークショップ会場用看板の作成

日比野館長デザインのワークショップ会場に掲出する看板を作成した。

②ワークショップ公開制作用備品の購入

ワークショップ会場等で使用する備品を購入した。

③小冊子「熊本市現代美術館の館長が市役所にご用聞きに行く理由」の作成（アンケート実施）

「ご用聞き」とは何かとまとめた小冊子を制作し無料配布。内容の記録と参加した市職員へのアンケート、日比野館長インタビューを掲載した。



「ご用聞き」の様子

地域の課題を、市民や団体とともにアートで解決する活動

(1)アート思考の体験ワークショップ

①ワークショップ「和紙でキャスティングをしてみよう」（動画を見て自分でやってみる WS）

開催した「かみと現代美術」展出品作家のウチダリナ氏を講師に迎え、和紙で色々なものをキャスティング（型取り）するワークショップを行った。アートラボマーケットに動画とキットを用意し、気軽に体験できるプログラムとして実施した。

②ワークショップ「さしがさばなワークショップ」（アーティストと一緒に無料WS）

開催した「かみと現代美術」展出品作家の半谷学氏を講師に迎え、熊本県産の畳の製造工程で出る「い草」の端材を原料にしたランプシェードを制作。不要なもの、捨てられてしまうものを世界に一つだけの作品に変身させた。



制作したランプシェード

(2)心の国際交流アートプロジェクト

①「MATCH FLAG PROJECT」（熊本駅前、辛島公園、下通アーケードで開催後、美術館で1か月継続）

サッカー日本代表とその対戦国の両方の国旗をデザインした旗を作成し、アートとスポーツを通じて互いにリスペクトする「MATCH FLAG PROJECT」のワークショップを10月10日(月)に開催、その後、美術館内及び不知火美術館、天草でも継続開催し、完成品をドーハに送りワールドカップ会場や、美術館内、熊本の街なかで掲示を行った。



マッチフラッグの様子

取組による成果

「ART LAB MARKET」をリニューアルする前と後では明らかに人の流れが変わった。まず、外に向けた広いガラス面にはカットニングシートによる大きな「ART LAB MARKET」の文字が外からも目を惹く。また、館内に入ると「ショップ」「ワークショップルーム」「展示空間」などを緩やかに滲ませるデザインによって、美術館に来館した人の脚が自然と「ART LAB MARKET」に向いており、人の気配があると人が入ってくるという好循環が生まれている。

そもそも美術館の入館者は展覧会によって大きく左右され、展示替え期間中はともするとエントランスがガランとした印象になりがちであったが、今回のリニューアルで熊本地震の時にも感じた美術館の匿名性と人の気配という重要な要素が増し、来館者数にかかわらず心地よい空間となっている。

継続して行っている「ご用聞き」は、アート思考について行政職員に気づいてもらい、行政から市民に広げることで、まち全体のウェルビーイングを目指す、大きなプロジェクトである。アンケート結果からも、行政職員に良い気づきやポジティブな思考が生まれていることが見える。また、ご用聞きを重ねることで、ご用同士を掛け合わせたり、企業と繋げることによる科学変化など、マッチングの要素も生まれつつある。ただし、システマティックにしまうと、とたんに効果が半減しそうな気がしており、このような縦断的なネットワークを、どのような形で軽やかなうねりにしていくのか、そこに潜んでいるアートの役割を、どう後押ししていけるのかが次の課題であると考えている。

今後について

アートによって市民が行政の施策をより身近に感じる仕掛けを行う。「ご用聞き」は継続しつつ、来春には行政と連携し総合計画を展覧会として公開。また、その土地ならではの時代を語り、「食」や味わうイベントの他、地元クリエイターによるアートフェア、市民とアーティストによる地域の長期的リサーチなどを計画している。

07

ネットワークの形成による
広域等課題対応支援事業
社会課題
広域連携
防災

中核館： 岩手県立博物館

実行委員会： **東北発 博物館・文化財等防災力向上プロジェクト実行委員会**

事業名： **東北発 博物館・文化財等防災力向上プロジェクト**

構成団体： 陸前高田市立博物館、石巻市博物館、とみおかアーカイブ・ミュージアム、川崎市市民ミュージアム、長野市立博物館、公益財団法人日本博物館協会、岩手県博物館等連絡協議会、独立行政法人国立文化財機構 文化財防災センター、特定非営利活動法人文化財保存支援機構、東北大学災害科学国際研究所

事業目的

東日本大震災被災地である岩手県、東北地方を拠点としたネットワーク形成により、国全体の博物館・文化財等防災体制の底上げに資することを目的とする。

課題意識

東日本大震災被災地では、被災した文化施設や文化財等の完全な機能再生を目指すとともに、文化復興や被災地自体の持続的発展のために、再生したそれらの活用をはかることと、今後発生が予見される多様な災害リスクをマネジメントするための措置を講ずることを両立するという難題を抱えている。

現状の認識

東日本大震災被災地においては、発災後の10年でインフラを中心とした復興が進展した一方、一度失われた街に根差していた歴史・文化をいかに活用、継承すべきかという点が次の10年に直面するであろう大きな課題であり、その解決に当たり博物館が果たすべき役割は極めて大きい。一方、全国各地の博物館や文化財等は、気候変動に伴う豪雨災害の激甚化や、東北地方太平洋沖地震津波に匹敵する規模の地震・津波災害再発といったリスクに晒されている。それに対し、東日本大震災以降、特に東北地方太平洋沿岸部で蓄積されてきた博物館・文化財等防災に関する教訓やノウハウは、国内はもとより、被災地を抱える県内、或いは東北地方内においてすら、十全に共有されているとは言えない。加えて、東日本大震災を契機として、地震や津波災害に対する意識は相対的に向上したものの、近年相次ぐ豪雨災害は、地震・津波以外の自然災害に対する博物館・文化財等の脆弱性を露呈させている。

目指すべき将来像

東日本大震災における博物館・文化財等の大規模被災という経験から得られた教訓と、現在進行形で被災地に蓄積されている被災施設・資料再生と、再生した施設・資料を核とした被災地の文化的復興推進に関するノウハウを、まずは東北という広域ブロック内で確実に共有し、博物館・文化財等防災の先進地域とすること。そして、当プロジェクトがハブとなり、東日本大震災以外の災害被災地や、今後大規模自然災害の発生が予見される地域との交流・協働を重ねることで、各地に蓄積された博物館・文化財等防災上の多様な知見を共有するとともに、有事にも即応可能な広域ネットワークを形成することを目指す。

本事業で工夫した点

県内の国・県・市町村指定文化財及び文化施設の位置情報と、各種ハザード情報を重ねて表示することができるオンライン地図「岩手県版文化遺産防災マップ」の作成に当たっては、岩手県教育委員会及び県内市町村教育委員会等から情報提供を受けながら、共同で共有物としてのマップを整備することによって、文化遺産に付随する所有者の個人情報の保護と、文化遺産の位置情報共有の両立をはかるとともに、一連の取組を通じて各自治体担当者が管内の文化遺産防災のあり方について主体的に思考・判断を行うことができるような事業展開に努めた。また、ともしれば単独の災害や、一つの被災地で完結してしまうきらいのある情報発信について、複数の被災地や災害種をまたぐ形で映像制作や展覧会の開催に取り組むことで、提供する情報に厚みを持たせるとともに、情報発信者間のネットワーク形成にも資するよう留意した。加えて、被災文化財の利活用を促す古文書データベース制作に当たっては、復興＝今後被災地で展開される市民参加型文化活動の成果を随時反映可能な設計とした。

文化庁からの コメント

豪雨や地震など災害被災リスクの高い我が国においては、適切な防災体制の構築が必要です。実際の東日本大震災の被災地から、その経験を踏まえた情報発信と広域ネットワークの構築に向けた取り組みを進めることは大きな意義があります。今後、災害経験のない地域や博物館へ知見と経験の共有が進むことを期待します。

事業の取組内容

東北地区博物館・文化財等防災マップ整備事業

(1) 博物館・文化財等防災マップ整備活動

① 博物館・文化財等防災マップ運用研修会

地域連携による文化遺産防災体制整備のため、東北大学災害科学国際研究所、文化財防災センターから講師の派遣を受け、岩手県の文化財行政関係者を対象として、現在の文化遺産防災上の課題と、その解決に向けた最新の実践例を学び合う研修会を開催した。岩手県及び市町村の文化財行政担当職員等60名の参加を得ることができ、後述する岩手県版文化遺産防災マップ制作に直接協力を仰ぐ機会とした。

② 防災マップ制作

東北大学災害科学国際研究所蝦名裕一氏の先駆的な実践に学びながら、岩手県内の国・県・市町村指定文化財及び博物館・資料館等文化財保管施設の8割強の正確な位置情報と、津波、土砂・洪水災害、火山噴火等の各種ハザード情報を重ねて表示可能なオンラインマップを制作した。

各種文化遺産の位置情報については、岩手県及び県内市町村の文化財行政担当者の協力により提供を受けたものであり、一連の取組を通じて、自治体の枠組みを超えて共同で県内の文化遺産防災に取り組むという機運の醸成に貢献することができた。



研修会の模様



岩手県版文化遺産防災マップのサンプル画面

博物館・文化財等の防災力向上に向けた共同情報発信事業

(1) 展覧会を通じた情報発信活動

大規模自然災害で被災した文化財等の再生に取り組んでいる、川崎市市民ミュージアム、長野市立博物館、陸前高田市立博物館の3館が共同で展覧会を通じた情報発信を行った。会場は陸前高田市立博物館と友好館の協定を結んでいる名古屋市博物館から提供を受け、今後同様の大規模震災発生が予見されている東海地方にお住まいの方881名に、東日本大震災や令和元年東日本台風被災地の現状と、博物館や文化財等の防災の必要性について伝えることができた。

また、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、これまで対面での交流が果たせずにいた3館の職員が、展覧会の準備や、関連事業としての展示解説会の実施を通して直接情報交換を行い、連携を強化する機会ともなった。

(2) オンラインツアーを通じた情報発信活動

同じ東日本大震災被災地に所在し、近年相次いで開館した石巻市博物館、とみおかアーカイブ・ミュージアム、陸前高田市立博物館という3つの文化施設が共同で情報発信を行うことによる被災地の文化施設間のネットワーク強化と、相乗的な人流形成を目指し、ツールとしてのデジタルコンテンツ開発に取り組んだ。学芸員の案内の下でそれぞれの施設の館内見学を追体験できるような映像作品と合わせて、施設見学の理解を深めるためのパンフレットを制作し、次項で紹介する当プロジェクトの専用サイト上で無償提供を開始した。成果物については当プロジェクトの共有財産として、各施設が今後の活動の中で自由に使用できるものとしている。



展覧会会場



オンラインツアー画面

取組による成果

博物館・文化財等防災マップについては、岩手県内における8割強の文化施設及び指定物件（国・県指定文化財については全件）の情報を搭載したオンラインマップを整備した。加えて制作の過程で、県・市町村担当者と協働したり、研修会を開催したりすることを通して、自治体の枠をこえた文化遺産防災体制の必要性を共有することができた。

また、展覧会の準備・運営を通じて、川崎市・長野市・陸前高田市それぞれで被災資料再生活動に携わっている者が初めて対面で情報交換を行うことができ、所産としての展覧会は短期間ながら約900名の方々にご覧いただいた。3月11日(土)を会期に含むことから、各種報道機関からの取材を受け、テレビや新聞を通じて一層多くの方に情報を届けることができた。陸前高田市立博物館と名古屋市博物館の関係性が深まる中で、令和5年度から、名古屋市博物館所蔵のロダン作「考える人」が陸前高田市立博物館へ長期貸し出しされる見通しとなり、当プロジェクトの事業も文化を通じた地域間連携強化の機運を後押しすることになった。

今後について

上記の取組により、今後中～長期的に博物館・文化財等の防災に関する情報発信を可能とするプラットフォームを整備することができた。整備完了が年度末となったことから、各種コンテンツがもたらす効果に関する定量的な検証は今後の課題となるが、定期的な観測結果をフィードバックしながら、情報発信法を不断に改善していく。

08

ネットワークの形成による
広域等課題対応支援事業

広域連携
価値の創造
アーカイブ共有

中核館： 公益財団法人 大谷美術館

実行委員会： **メタバースミュージアム事業実行委員会**

事業名： **メタバース美術館の構築事業**

構成団体： 小矢部市大谷博物館、公益財団法人遠山記念館、公益財団法人渋沢栄一記念財団

事業目的

デジタル技術の活用による新たな美術品鑑賞と、高精細複製品の制作により、柔軟性の高い展示の実現や、リアルとデジタルの両面で美術鑑賞できるようにする。さらにこれらのコンテンツを、他の展示施設との間で共有・交換することにより、上記鑑賞のネットワーク展開を図ることを目的とする。メタバース技術を用いることで、美術作品の中にアバターとして入るなど、新たな美術品鑑賞をより多くの人がネットワーク上で体験できるようにすることを目指す。

課題意識

美術品は作品によっては展示環境の確保や運搬に特殊な条件や技術が必須であり、また運搬にかかるコストや手間についても、展示施設運営の大きな負担となっている。遠隔地にいながら、臨場感のある体験が可能となるメタバースの技術が世界では広がりつつあるが、美術鑑賞の分野については、その試みが未だ十分になされていないと言え、展示施設の抱える問題の解決策となり得るメタバースを用いた新たな美術鑑賞方法の開発が待たれる状況にある。

現状の認識

日本画や浮世絵など自然由来の絵の具が多用されている作品は、展示や運搬に、特殊な条件が必要であるため、館外に持ち出すことが難しい場合があり、美術品の保全を考慮すると、遠隔の美術館同士が双方の美術品を交換・展示することは容易でない。また、遠隔地にいながら、臨場感のある体験が可能となる仮想現実技術（VR:Virtual Reality）を基にしたメタバースの利用がアミューズメントの世界では広がりつつあるが、美術鑑賞の分野でも試行が始まっており、展示施設の問題解決策となるDX化やメタバースを用いた新たな美術鑑賞の導入が求められている。これによって、多くの人に美術作品鑑賞の機会をより多く提供でき、美術品や、文化への理解が深まり、また、想像力や独創性に優れたイノベーション人材の育成へつながることが期待される。

目指すべき将来像

博物館法改正に見られるように、今後の美術館は、作品の鑑賞の場にとどまらず、体験の場として、入館者の創造や発想の場として活用されることが期待される。

アートを通じ、自己の内発的アイデアや創造性を培う場としての美術館を作りをしていくことが、当館の目指すべき将来像である。メタバース等の最新技術を活用し、体験を通じた教育の場としての美術館を構築し、ネットワークを通じて幅広く紹介していくことを目指している。

本事業で工夫した点

リアルとデジタルによる観察、感動鑑賞の違いを観覧者はどのように感じているか、絵画等の芸術作品の鑑賞が詩歌などの文学作品の鑑賞にどのような影響を与えるかについて、客観的、数量的の評価をするため、セミナーを開催し、参加者に対し実験心理学的手法によるアンケート調査を行った点。

また、これらの評価にあたり、IT教育の専門家、イノベーション人材育成の研究者、アート鑑賞の教材作り研究者などの有識者なるからなる評価委員会を設け、アンケート結果を踏まえながら、今回のイノベートミュージアム事業の評価を行った点。

文化庁からの コメント

インターネット社会において博物館資料のデジタル化と発信が重要になってきています。アクセシビリティの観点だけではなく、実物では不可能な鑑賞体験を提供できるデジタルコンテンツは、資料への理解を進め、価値や魅力を高めることにも寄与します。物理的な利用制限がないデジタルコンテンツの一層の活用が望まれます。

事業の取組内容

コンテンツ制作と展示事業

最新技術を用いた複製美術品やデジタルコンテンツ制作・展示することによって鑑賞者に新たな美術鑑賞体験を提供した。旧古河邸にて1月15日(日)～2月28日(火)まで展示。

(1) 所蔵美術作品の高精細複製品

大谷美術館の所蔵作品の高精細複製品を制作することにより、展示環境に縛られない作品鑑賞ができる展示を行なった。



重要美術品「舞踊図」無款

(2) デジタル相撲絵映像型

実際の相撲絵浮世絵と、その作品を元にデジタル映像を制作し、作品への没入感を味わえる展示を行なった。リアルの鑑賞ができる立体模型も合わせて展示した。



(3) 旧古河邸 360° VR と旧古河邸模型

ブラウザで旧古河邸の外観を鑑賞できる「旧古河邸 360° VR」と、3D プリンターを利用したリアル鑑賞できる旧古河邸



(4) メタバースミュージアム

「Spatial」を利用した大谷美術館のメタバース美術館を構築し、セミナー等で体験会を実施した。



美術鑑賞セミナー事業

事業で制作した成果物を活用し、リアルとデジタル両方のコンテンツを用いた美術鑑賞セミナーを開催し、俳句鑑賞などのワークショップを通して学習効果の検証を行なった。

(1) 大学生向け美術鑑賞セミナー (日時：1月16日(月) 13:00～17:30)

参加者：青山学院大学大学生・院生(留学生含む)6名、Aogaku Hicon

関係者：1名(成人)計8名

指導員：青山学院大学経営学部教授 玉木欽也、青山学院大学名誉教授 佐久田博司、Aogaku Hicon 関係者1名

(2) 子ども向けセミナー (日時：2月4日(土) 9:30～11:30)

参加者：未就学児1名 中学生1名 大学生1名 成人7名 計10名

(3) 大人向けセミナー (開催日時：2月18日(土) 9:30～11:30)

参加者：大学生向け美術鑑賞セミナー



美術鑑賞セミナー実施風景

取組による成果

「コンテンツ制作と展示事業」については、新たな美術品鑑賞の方法を提供するとともに、再現度の高い複製品を展示することにより、リアルとデジタルの両面からより深い美術鑑賞が可能となった。

「美術鑑賞セミナー事業」ではメタバースの利用範囲が広がり、美術品の新しい鑑賞方法が受け入れつつある現在、IT技術を用い、美術作品の中にアバターとして入るなど、新たな美術品鑑賞手法をより多くの人が興味をもって体験できることの提案があった。また、データ数が少ないことから、統計的に有意な差は認められなかったが、一般向けセミナーでは絵画鑑賞が俳句等の鑑賞力に影響を与える可能性は考えられ、今後のこのような調査を進める意義について確認された。

今後について

本事業の最終的なゴールの一つは、大谷美術館をメタバースで再現し、その中を歩きながら、多くの人が気軽に楽しく、歴史的建造物と絵画を鑑賞することではないか。そのような体験を通して、美術や建築に対する関心が高まり、リアルな体験に繋がり、感性や創造力が豊かになっていくことではなからうか。今回の成果が、このような「新しい美術館」や「新しい美術鑑賞」の創造と「新しい創造力」の醸成に繋がっていくことが期待される。



文化庁

Innovate MUSEUM事業 文化庁企画調整課博物館振興室
〒100-8959 東京都千代田区霞が関3-2-2 TEL:03-5253-4111

2024年3月21日発行